



TITLE:

生活に対する勇氣 (前編) : 一五年戦争初期・京都の消費生活運動と雑誌『美・批評』集団における「学習」の位置 : 「中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題」 (1)

AUTHOR(S):

吉田, 正純

---

CITATION:

吉田, 正純. 生活に対する勇氣 (前編) : 一五年戦争初期・京都の消費生活運動と雑誌『美・批評』集団における「学習」の位置 : 「中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題」 (1). 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2003, 2: 7-38

ISSUE DATE:

2003-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/43803>

RIGHT:

吉田：生活に対する勇気（前編）

## 生活に対する勇気（前編）

～一五年戦争初期・京都の消費生活運動と雑誌『美・批評』集団における  
「学習」の位置：「中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題」(1)～

吉 田 正 純

Courage to live (part 1)

— Position of 'Learning' in co-operative movement  
and "Bi-Hiyo (Aesthetics/Critics)" group in the early 1930's Kyoto:  
'Masakazu Nakai and some issues on <Learning for Resistance> (I) —

Masazumi YOSHIDA

この小論は、1930年代の京都を中心に雑誌『土曜日』『世界文化』などを舞台に反ファシズム的文化－社会運動を展開した中井正一・能勢克男らのグループ——『土曜日』集団の運動——学習論を対象に分析する「中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題——1930年代前後・京都の反ファシズム運動と民衆教育の底流」の一部である。当論文ではこれらの分析を通じて、広義の「社会運動」における学習を合目的な合意－「主体形成」の側面ばかりでなく、葛藤と多元性を孕んだ価値変容－解釈の複合的過程として既述する枠組みの構築をめざす。それと同時に上記の『土曜日』集団を1930年代初頭・中期・後期および戦後期にわたって追跡しながら、その社会批判－文化批評的な自己教育的活動の側面の変化と連続性を同時代的・世界的な認識地平との比較から析出することを目的とする。

以下ではまず論文全体にわたる「抵抗と学習」をめぐる分析アプローチと対象確定の方法的検討を概括したのち（第二章）、第一部（1931年前後京都の消費組合運動と『美・批評』の実践をめぐる議論と学習）の前半部に進みたい。ここではまず「抵抗の学習」を取り巻く背景的社会－文化情況に触れつつその「啓蒙」一般とは異なる批判的自己教育の性格と条件を概括し（第三章）、続いて京都の消費組合と雑誌『美・批評』を取り上げながら以降の『土曜日』集団の運動の原基となる学習－運動観を考察したい（第四章）。（なお続く後編では中井正一のこの時期の諸論稿における教育／運動理論を分析しながら（第五章）、同時期のベンヤミンらの批判的試行との比較検討（第六章）・近しい背景をもつ戸坂潤・三木清らとの関連と差異の検討（第七章）を通じて、よりこの問題を明確化する予定である。）

第二章 「抵抗と学習」への問い：先行研究の検討と「学習論」への方法的アプローチ  
すべてが冷たく、潤れて、凍っている冬が次第に崩れて、……春が来る。朗らかな、暖かい、

みんな芽ぐみはじむる春がくる。歴史の幾コマかは絶えずいつも時代の冬の中に浸された。そして、長い間人々は春を待つ。(中略)

しかしわれわれの春はまだ浅い。冷たい、潤れた、凍ったものがいっぱいである。春はまだあの空のうちに眠っている。(中井正一「春のコンティニューイティー」<sup>1)</sup>)

## 2-1 先行研究再検討の角度

歴史的／社会的な複合状況と「思想」の変形が交錯する局面としての〈学習－運動〉プロセスの解説に焦点を当てるならば、従来の『土曜日』グループへの研究関心も別様に評価されうると考える。この論文では機能主義や「プラグマチズム」等の何らかの一貫した概念や〈思想〉一般への(時に倫理的な)還元と、ファシズムや「近代」といった〈時代〉状況への(「現代との類似性」のような)一面化の双方を避けながら、より緻密な葛藤や変化の相互作用を対象とする。その際複数の当事者・関係者の想起や自己評価・解釈を、静的な連続性よりは固有の文脈での変化・中断・衝突として現れる出来事の生成変化として考察しながら、その人々の回答自体よりは「問い」の構図を浮き彫りにしたい。そのような角度から先行研究を顧みればこの試みへの評価や分析そのものを可能にしかつ拘束してきた地平や問題構成を示すとともに、その研究・論争史の軌跡からいくつもの示唆を受け取ることができる。それらはいわば「中井正一思想」と「1930年代の状況」という二つの独立した実体化した定数に引き裂かれつつも、その間隙に論及する側みずからの生きる思想状況と問題意識の投影をも読みとることができるからである(【資料1】参照)。

【第一期】まず1950年代に遡れば中井正一の没後その「戦後期」の活動が山代巴(尾道・広島)や羽仁五郎(国立国会図書館)によって記録が残される一方、当事者の真下信一・武谷三男らが「主体性論争」のように「戦後」をめぐる議論の渦中に残っていた。そうしたなか『世界文化』『土曜日』等の試みは戦時下の密閉・抹消された記憶の中で「非転向組」とは別様の抵抗として久野収ら当事者と関係者によって半ば「神話」として口承されてきた。さらにそれは平野謙らの『近代文学』の討論のように、1950年代後半の「唯一の前衛神話」の危機と呼応した鶴見俊輔・藤田省三らの「転向」の再検討を背景として「発見」されることになる。そこでは「60年安保闘争」敗北後に復活しつつある「戦後支配体制」の起源とされた「1930年代ファシズム」への関心と並行して、従来の政党・労組とは異なる新しい組織・運動のモデルと期待された。それは1965年前後の『思想の科学』グループの共同研究・討論を頂点として、上記の鶴見・久野らによって自発的な市民運動と「大衆」に接近しようとする「自立した」知識人を結ぶ思想史的・組織論的遺産として掘り起こされた。他方その過程ではファシズム下での「モダニズム文化」の興亡への関心と共鳴して、多田道太郎らによる「美学者・中井正一」の大衆文化論(映画・演劇など)の先駆けとしての評価も広まった(藤田竜生など)。こうした志向性は『思想の科学』グループの国家・政策的レベルに留まらない「市民社会」における政治空間の模索を、民衆の日常生活に深く根ざした文化と緊密に結合した様態で考察する関心から生まれたといえる。これらはやがてベトナム反戦運動など新たな思想と運動の形質を模索する実践的志向を派生したが(所美都子など)、「知識人——大衆」の一方的啓蒙の図式と「政治——

文化」の二分法を脱しきれず、結果として「知識人・中井正一」の思想」の有効性や倫理性のみに収束する傾向を有した。その結果『世界文化』『土曜日』等の試みは（平林一らの研究や当事者の証言を除いて）総じて付随的・挿話的に扱われ、やがて松田道男の「知識人の独立宣言」と三浦つとむの「機能主義者の妄想」のような両極端の分岐を経て研究は熱気を失っていった<sup>2</sup>。

【第二期】しかし1970年代中盤以降、再び鶴見・久野らが改めてメディア・大衆社会論の文脈での「コミュニケーション研究」の一環として再評価した雑誌『世界文化』『土曜日』が、その復刻版発行と併せて関心を集める。それは管理社会化の進行と社会運動の後退局面が「1930年代への回帰」を想起させた以上に、困難な社会状況下での文化・討議を重んじるローカルな思考・運動の可能性の模索として共感を呼んだ面が強い。その結果従来の「思想家中井」単独のテキスト読解よりは「反ファシズム文化運動」としての独自性やミニコミ・地域闘争に重ねられ、和田洋一や斎藤雷太郎ら複数の同人による声の多様性がむしろ再評価された。この時期はまた「正統派」マルクス主義と異なる方法で「近代」への根底的批判的を投げかける「世界的同時性」（吉見）の原点としての1930年代（とりわけワイマール期ドイツ）への関心が高まるなか、そのメディア・文化の政治への同時代的思考との共鳴や「翻訳」の新しさが注目された。そこではそれ以前の感情移入的な論評から離れて「管理社会論」や「国家論ルネサンス」に触発された杉山光信・高島通敏・佐藤毅らの政治学・社会学からの多角的な研究も進んだ。しかしそれとは逆に「知識人」・政治思想家としての中井正一たちの「抵抗」の有効性の評価はより限定的なものとされ（馬場修一・菅孝行ら）、中井の「時局」肯定の文書の公開と併せ実践上の意義は疑問に付されることになる。1980年代にはメディア論と大衆文化の政治の研究をより深化させる形で竹内成明・池田浩士・稲葉三千男らによる中井や『土曜日』の重要な研究がなされ、図書館論からも加藤一雄・岡村敬二らの批判的考察が出るが、次第に全般的に質量とも低調となっていた<sup>3</sup>。

【第三期】ここには「戦争とファシズムの時代」が（復活が囁かれるときさえ）特異な「逸脱」と誤謬の季節として切断され、「抵抗」の営為も自由主義とマルクス主義の二極間の隙間で肯定／否定されてきた前提が、「冷戦」終焉後の状況で再審された背景がある。その結果1990年代半ば以降は中井たちの「政治的抵抗」の意味は消極的に言及される一方で、「モダニズム美学」への再評価を中心に「文化」・芸術領域への揺り戻しが進行した。そこではそれ以前の文化－政治領域を横断する「モダニズム」の世界的同時性への史的研究の蓄積を踏まえた文献的研究を生む一方で（高島直行・木下長広ら）、潜在的には「政治」の切り捨てと純粹「文化」／テキスト解読への集中も指摘できる。一方教育学分野では山崎雅子の労作が知識人の思想的抵抗という枠組みを引き継ぎながらも、「戦後」（京都人文学園）との連続性に焦点をあて広範な雑誌・メディアを通じた「対抗文化」の形成への考察として発表されてきた。他方で例えば山之内らの「総力戦」研究や小岸らの「ファシズムの想像力」研究のような「戦前／戦後」や「ファシズム／資本主義／社会主義」を支配秩序の形成の面での連続性から再考する試みと呼応して、この「抵抗」を特異な状況よりは現在に続く日常での権力関係に位置付けさせた（荏部直・小畑清剛ら）。この中からそれまで黙殺され問題とされえなかった中井の「転

向」と戦時協力の問題も、個人的な「抵抗」の挫折よりその連続性と共有された困難として取り上げられ、特に「戦後啓蒙活動」への屈折についても再考されることになった（鈴木正・天野恵一ら）。この探求は1990年代の戦争責任を問う作業の中でより個別的な事例が探られると共に、単に全体主義・軍国主義政策や「上から」強制された屈服ではない「自発的協力」—能動的参加への関心に促された。さらには上野俊哉のように中井たちの「同時代性」を C. L. R. ジェイムズの反植民地主義と大衆文化の政治に接続することで、「帝国」内部での「抵抗」から解き放つ可能性も模索されつつある。それらはまた『土曜日』グループの戦時下と戦後期の活動に引き継がれた民族—「国民」の問題機制を肯定／否定のための指標としてではなく、困難な格闘を要する「躓きの石」として浮上させる。この間の考察はあらゆる対立構図を相対化してテキストの上滑りと抵抗の無効化や時代状況一般への再帰といった危険と表裏一体であるとしても、評価の起伏を超えて長く扱われ続ける意味はこれらの思想的魅力のみならずその批評精神と実験的な実践への試行が探り当てた問題領域の深さと解きがたさをも示している<sup>4</sup>。

## 2-2 「自己教育運動」からの再論

教育研究の分野では中井正一の「理論的」蓄積から『教育』の論理学を引き出そうとした佐藤（晋）の諸論考があるが、中井をはじめ『土曜日』グループのより広い実践活動に関心を払ってきたのは成人の自己教育活動を対象とする社会教育研究であった。特に主として戦後期（特に尾道時代）の中井らの活動が取り上げられ、戦後社会教育行政確立以前の一連の「啓蒙文化活動」として（中井の社会教育・図書館論を含め）論及されてきた（北田耕也・朝田泰ら）。またこの終戦直後の取組みに連なる思想の原点として戦前の『土曜日』等の取組みが、社会教育全体が「教化動員」に突き進む流れへの抵抗として取り上げられた（碓井正久・笹川孝一ら）。特に十五年戦争下での「社会教育の戦争責任」への一章を設けた大串隆吉らは、（二次資料とはいえ）『土曜日』を大衆の「生活の中にインテリジェンスを」根付かせ「生活者からの投稿と記録の重視」を試みた点で「教育運動を志向した」ものと位置付けた<sup>5</sup>。

これら戦前期の活動と重なる時期（十五年戦争初期）の社会教育は1920年代までの自由教育運動・労働者教育や社会教育研究の萌芽が摘み取られ、ファシズムの台頭の中で「社会教化」政策に塗り込められ逼塞してゆく時代として把握されてきた。しかし「戦後自己教育運動」への流れを中断する空白ないし暗黒の時代としての定義は、教育学史の上でも「大正期」思想の自己解体過程や戦時下での「学」と文化・行政施策の確立、戦後への「国民教育」への直線的以降など検討すべき課題を多く残す。加えて社会教育研究において戦後社会教育の方針がむしろこの「教化」期の地方・団体・行政中心の着想に（人的にも理論的にも）多くを負う事実を鑑みれば、社会教育研究は押し付けられたどころか「主体的に」動員装置に転化した構図が浮き彫りとならざるをえない。とりわけ戦争・軍国主義への全面協力・妥協に限らず「昭和研究会」をはじめとする翼賛運動への（教育科学研究会らの）「批判的」参画についても、国家—民族・「体制改革」への融合の「戦後」への繰越の面からも改めて検証する必要がある。そうした面から戦後社会教育の行政と思想の再建過程で再演されるこの「教化と対抗」の図式に沿った自己教育運動の連続性からは逸れた、自然発生的で「教育」と名付けられない〈抵抗—学

習〉の試みを掘り起こす意味があるだろう。そしてこのことはこれまでの自己教育運動とその研究の意義を低めるよりはむしろ歴史的・政治的文脈で再評価し、同時に現在のより広い文脈での自発的な社会的・文化的行為・運動との連結を位置付けるための礎石ともなりうる<sup>6</sup>と考える。

また隣接する領域では『土曜日』グループと深い繋がりを有し、みずから「唯物論研究会」（唯研）グループなどを形成した戸坂潤の、「教育と啓蒙」等の社会教育論（社会教育政策批判）には自己教育運動の歴史でも関心が払われてきた（小川利夫・畑潤ら）。国家－行政による「教化」に一元化する社会教育に対する部分的な改良にとどまらない根底的・原理的な批判と、それ以前の自由教育・労働者教育運動の限界を突破する代替の思想・構想は、後述のように中井・久野・真下らの思想と実践に深い影響を与えている。だが同時にこの反（社会）教育とさえいえる批判と対比して「政治的変革の方向」として呈示された「啓蒙」において、「科学」と「教養」の大衆化という内容と路線が思想的・実践的に（すでに）困難を抱えていたことも指摘せざるをえない。『土曜日』グループの試みはその点で国家と地域を包摂する支配秩序の再生産機構に依存する社会教育政策だけではなく、「知識人」の政治的前衛主義を前提とした「大衆啓蒙」路線が挫折・破綻した「後の」自己教育運動の模索としても把握することができる<sup>7</sup>。

この関心に前節と併せて特異な状況下での「抵抗」の賞賛ではなく現在に繋がる問題機制を読み込むならば、その焦点は中井正一たち個人の思想の論理的・倫理的な妥当性よりは一つの「社会運動」としての社会状況との格闘における自己教育－学習過程に沈潜できるだろう。そしてそれは外部から目的・方法・実現過程を計画し予測可能な「社会変革と自己形成」の構図に収束するのではなしに、「理論」や思想が特定の局面と人々に意図的に働きかけ相互に交錯しながら予期しない対応と形態の変容を迫られ再／解釈する往復運動となる。この論文では『土曜日』グループが批判的「知識人」の反ファシズム的学習サークルとして出発しつつも、狭義の「政治」啓蒙から文化的・社会的な民衆の自己教育－学習として都市部でのメディア・大衆文化を通じた自律的な「社会運動」の模索に移行したと評価する。その上でこの人々の戦時下・戦後の活動への連続性と切断を思想と状況双方の再検討することで、理論や実践の成否の審判ではなく一定の通時的な認識と実践の論争的軌跡（とりわけ「国民」と「啓蒙」をめぐる）を明らかにしていきたい<sup>8</sup>。

### 2-3 分析方法と対象

こうした文脈で教育学一般とは異なる広義の社会教育ないし批判的成人教育としての自己教育運動研究における固有の対象として、集団行為一般と異なる「社会運動」における教育－学習活動を設定することが必要である。従来の社会教育研究とりわけ「自己教育運動」においても労働運動・住民運動等における教育－学習が取り上げられてきたが、それは一枚岩の「社会変革」の目的に従属する参加者の意識変容という枠組みにしばしば制約されてきた。近年の「ネットワーキング」的な組織分析でも、いわば自己目的化した「自己現実」や「人間関係」が当初の課題や目的から切り離されることで、かえって完結した閉鎖的サイクルとして社会的

文脈や効果が捨象される問題が生じる。それは「運動」という対象への分析枠組みとして個人を社会構造—機能の付随的な変数とみなす前提に加えて、集団の目的合理的な（学習）手段—戦略の採用とその内部での個人の（達成）価値統合というモデルに起因すると考えられる。これらの方法ではこの論文が分析対象とするような「危機」—社会変動局面の都市空間における可変的なネットワークと価値形成を特徴とする社会—文化的運動の側面を概念化するためには抜け落ちる領域が余りに多い。ここではかつて類似する問題に突き当たった社会運動論における「資源動員論」に対するいくつかの「古典的な」批判を再検討の素材としながら、「社会運動と自己教育—学習」を対象化する方法を定位したい<sup>9</sup>。

1970年代以降「新しい社会運動」研究を進めた例としてトゥーレーヌの分析枠組みを挙げれば、そこでは合理的戦略選択や価値統合としてではなく全体性（賭け金）・行為者（アイデンティティ）・対立（敵手）からなる社会的企て——行為への参加の側面から把握された。この研究の「ポスト工業社会」における従来の労働運動に代わる地域運動等の「未来予測」的な期待は失敗したとはいえ、参加者の社会的経験や価値内面化・「文化」創出といった領域への理論化作業はなお歴史分析にも使用可能である。それはリベラル派の民主社会における自立的個人の合理的行動—自己実現の楽観的前提にたった「学習社会」論だけでなく、「正統派」マルクス主義の経済還元論や狭義の政党—組合政治に収束する労働者教育論とも峻別される教育—学習の析出のために有効である。ここでは特に権利要求や圧力活動といった「アフアマティヴな闘争」と区別して、危機／閉塞の行動に特徴付けられた「危機のなかの闘争」の分析が、（進化論的見解と異なる）社会変動の通時的な研究との関連で重要だと考えられる。これらは『声とまなざし』では【資料2】の図のように行為者Iが脅威や排除・剥奪といった敵手＝障害物Oに対し、社会的組織の再編(1)や意思決定への制度的参加(2)または新たな社会秩序(3)といった目的—全体性Tを集散的にめざすものとモデル化される。そこでは対立者Oと共通の土俵—掛け金Tが共有されておらず新たな社会的な組織やシステムを再構築・建設するための、行為者—アイデンティティIが「集合体を復興」させ結合する文化的水準（と「社会学的介入」）が位置づくことになる<sup>10</sup>。

この研究後に迎えた「『新しい』社会運動の衰退」の局面ではこうしたT—O—Iの安定した三角形自体が崩壊するが、それは（デュベらが指摘するように）不活発や危機よりはむしろ一般的な「社会運動」の姿を浮き彫りにする面もあった。何より「全体性T」の審級を（労働運動に代替する）普遍的価値や展望を共有して、「一つの社会に一つの運動」といった一元的な政治的次元に統合されるのではなく、むしろ多元的で複合的な過程であることが認識された。このような「全体性の解体」とも言うべき事態は「新しい」局面というよりは、（ラクハウ／ムフラが分析した）戦間期以降の労働者階級の危機と政治戦略の節合という形で提起された問題を引き継ぐ性質をもつ。そこでは前記図表における組合—政党(1)(2)への編成や国家権力奪取(3)への予定調和的モデルの移植（理論がそのあるべき「戦略」の見通しを示す）ではなく、複数の戦略の混在と葛藤の緊張を孕む論理の折衝として論じられることとなる。この論文でも『土曜日』などの運動を「反ファシズム」や「文化啓蒙活動」といった特定の思想的目的を共有すること前提にするのではなく、参加者や受け手が異なる論理と賭け金をもちつつ「全

体性」の質自体を随時問い返す試みと再解釈する<sup>11</sup>。

さらに対立軸—敵対性〇自体が一つの対決構図の反映でありやがて（分析的介入を通じて）二項対立的な「敵」へと収束するという展望も、複数の敵対性の横断的で重複的な交差のなかで問い直さざるをえない。さらにそれは同図のような組織的・制度的水準で明示される障壁だけではなく、様々なメディアや文化装置または社会的・政治的な空間における諸言説をつうじた微細な自発的服従と抵抗の無数の亀裂としても生じつづけてきた。それはファシズム研究においても資本主義（ないし社会主義）の特異形態や外部としてではなく、農村社会・教育文化機構・人文科学・ジャーナリズム等々複数の固有な起源と基盤をもつ内的な支配と服従の論理の集積として再考させる。同時に『土曜日』グループの抵抗をも「人民戦線」的な統一性の失敗を戦術的な不十分や客観的条件に帰するのではなく、そこで副次的な課題へと周縁化された「抵抗」の断片として結合する可能性をひらく。

さらに全体性に対立の配置換えは何より「社会運動」の主体—アイデンティティをより非本質的で状況依存的でありながら、同時に境界が可変的で異種混淆的な歴史的プロセスとして捉えなおすことを必然化する。それは表面的な「運動主体」や行為者内／間の多様性／多元性ではなく政治的—社会的—文化的次元それぞれが固有の論理をもって結節する、むしろ矛盾と抗争を内包しながらそれ自体を創発するダイナミクスとして把握される。その中でこそ同図のようなアイデンティティⅠの直線的な「系統進化」を反復するだけの「自己形成」ではなく、むしろ行為者を横断する差異化を通じて時に切断・融合・飛躍する触発の契機として「自己教育」運動を位置づけることができる。ここではこうした全体性・対立・アイデンティティの拡散と複合化への認識は比較的新しく共有されたものとはいえ、戦間期にはすでに「労働者階級」の運動としての危機とその克服という課題が鋭く世界的に問われはじめられたと仮定する。本文ではこの課題に（「冷戦期」における抑圧・順延の問題と併せて）強度の閉塞のなかで応えようとした「抵抗」の複合的かつ実験的な模索として、『土曜日』グループの「社会運動」としての軌跡を分析したい<sup>12</sup>。

#### 2-4 共有しうる現在の課題へ

こうした政治／文化運動と相対的に異なる「社会運動」の位相からその全体性—対立—主体の分節化を再検討するならば、それを取り巻く空間的—時間的条件も均質な「客観的」定数ではなく多義的で非連続な次元を構成する。『土曜日』グループにおいてはナショナルな水準での「反ファシズム」の意図の背後に、より自律的な生活・文化圏を形成しながら「文化の政治」における「改造の十字路」（鹿野）が1930年代に入り分岐し末端でせめぎ合う「帝国」片辺の都市である京都という固有の舞台での政治的拮抗と文化的空間創出の模索を読みとることができる。その場合都市空間は集合的な生産—消費機構のローカルな単位や「国家／政府—国民／住民」の対立関係を反映する「縮図」としてだけではなく、濃密な情報と意味の集積によって自律的な管理—抵抗の網を形成する固有の「場の論理」（カステル）を保持する。そこでは複数の全体性の結節点を形作る（より小規模で自発的な）メディア空間と、交差する対立を集約する偶発的な「事件」に照準する情報空間に加えて、空間—場の共有そのものが生成変化する



アイデンティティの決定的な要素となる。こうした空間把握のもとでの抵抗と学習の接合は知識の共有や一義的な対立—目標の内面化よりは、むしろ諸個人の意識と行動の否定—創造の契機を含む過剰な意味生産を担ういわゆる「歴史性」(トゥーレーヌ)の性格を探り当てることができる<sup>13</sup>。

このような都市空間における社会運動の位置付けはさらにその時間性においても単線的な時間軸進行とは別の、寸断／停止／飛躍／逆行を織り込んだ複数のリズム——中井の云う(ハイデガー・ベルクソン流の)「生きた時間」として展開する。社会変動の曲線よりも微分的なこの「歴史性」の折り目は微細な日常や発話に至るまで均質化する「国民国家」や「大衆社会」の独唱ではなく、国境を越えて進行する「危機」の連鎖の同時性への反応と差異・軋みにこそ現れる。特にここでは意味の伝達機能に反する産出的「媒体」——メディアと翻訳、運命的な「時局」の流動に抗する身体を表徴する「リズム」——運動と集団、生産——消費のサイクルから外れる「憩い」—休止(余暇)と思考に焦点づけて考察したい。そこから改めてこの時代の「抵抗」の意味を「黄金の1920年代」と「戦後民主主義」に挟撃された〈暗い谷間〉ともリベラリズムの〈最後の光輝〉とも異質な、「進歩」の展望が途絶する「危機」そのものの裂開の場に立会った記録として認識する。そして「ファシズム——総力戦」の機制は「現在」にいたる自己教育にとって特異な一時期の妨害要因ではなく、むしろ「科学的」——政策的関心からなる学としての教育と涉り合う民衆の「自発的学習」の組織化をめぐるたたかひの起点として把握される<sup>14</sup>。

『土曜日』グループがあい対し思考した「危機」は国家権力による一方的な「暴力」を押し立てた都市空間の全面制圧への正面突破よりは、まさに「非常時」という時間性を軸に異質な抵抗——「革新」の逼塞と投企をからめ取る再組織化との無数の攻防に生じている。それは都市の未分化な動揺と不安を内外の〈危〉への脅威を梃子に「決戦」の時空間に糾合するカタストロフィの爆風から、自らの否定の契機を経た〈機〉——転換のチャンスを招来する媒介へ転ずるための微かな糸口を手繰り寄せる模索である。私たちが遠く隔てた過去の苦闘に接近するためには「危機」を過去や未来ではなく現在の現実の内に現出させ、「解放」に向かう途でそれが「歴史的主体に思いがけず立ち現れてくる」(ベンヤミン)瞬間のイメージをとらえる以外ない。それゆえこの論文では自己教育の「学習論」を「時代」の代入で利用可能な超歴史的概念として抽出するのではなしに、逆に潜在する「危機」を引き付け我有化する様々な交錯する意図と言葉の断片を編み込んだ綜合体として編み直す<sup>15</sup>。

社会運動とりわけこの「危機」に際した運動にとっての自己教育——学習の代えがたい意味は硬直したドグマへの自己反省ばかりでなく、何より掻き消されたマージナルな存在の叫びに呼び応えようと努めることにあると考える。そこで絶望的に孤立し閉塞した時空間でこそ〈集団〉において多元性／複数性へと開かれ共通の「言葉」を掴みとり、別な権力関係と歴史を紡ぐことを「学ぶ」かも知れない微かな希望がこの実践の遺した課題であるからである。これに応えるこの論文の課題は「現在」から「意義と限界」を評するのではなしに、より入り組んだ抑圧と抵抗の拡散が継起するいまに共有しうる「危機」を発見し「自己教育」を想起可能な「現在時」へと引き寄せることにある。その意味で同時代に戸坂潤と三木清が非妥協の反体制

と体制内変革の両極で孤立と獄死に至った傍らで、その狭間で屈服し敗北しても生き延びて思考し語り続ける「ガリレイ的選択」をした中井正一たちの挫折と再起に暗中模索の「私たち」の学習を掘り起こすことができると信じる。

### 第三章 状況と「介入」：1931年前後の運動／思想空間と「自己教育」の転換

それが彼らの一八三〇年であったのである。一九三〇年、地球の回転がもし意味ありとすれば、そこに多数の人名と、数個の事件と、数個の論文の名をあげればよい。もしないとすれば……「名前をかえよ、そうすればそれはまた汝である」。(中井正一「一九三〇年」<sup>16</sup>)

#### 3-1 「暗い谷間」への疑問と「自発性」の隘路の狭間に

この引用で中井は1830年パリ七月革命前夜のドイツに仮託して「反抗と自由の欲望」がスポーツとスターに投じられ「圧迫は自己軽蔑を生み、自己軽蔑はさらに、一種の絶望的機知、絶えざる窮余の諧謔を生じた」(プランデス) 絶望を小文に圧縮する。「かつての自由の闘士が暗愚なる反動に移行した淋しさ」の「苦しい時代の苦難、苦難の苦しい時代」(シャミッソー)の憂愁や自暴自棄はしかし、ヨーロッパ各地の民衆蜂起で一変するハイネやグッコーの驚愕と希望を想起するものでもあった。その後1848年まで続くメッテルニヒらの血の圧制はあまりに暗示的であるとはいえ、大恐慌から侵略戦争に向かうファシズムの勃興期の時流にあたっての「危機」への抵抗に向かう意志表示であることは間違いない。

この小文で論ずる日本の1931・32年は無論この時代とは大きく異なる道筋を辿るが、幾重にも試みられた抵抗の試みは「暗い谷間」という評価が暗示するような、予め敗北を約束された隘路での徒花の繚乱ではなく、むしろファシズムの眩惑する「光」とのコントラストをなす漆黒の深さを強調する。それは繰り返される「現代的意義」への参照や類似性やある運動の途絶の中で強いられた終末的抵抗といった評価が前提とする「現在」の隠微な連続と肯定ではなく、むしろ政治・社会・文化の多岐にわたり混沌と実験のなかで可能性が模索された1920年代が急速に単一の秩序の「決戦」へと収束する局面の失敗し行き詰まった試みの「廃墟」を想像させる。私たちは誰もが知る結末からあるべきだった別の可能性から過去を裁いたり、逆に「古典となって蘇るようなアクチュアルな思考」(池田)を切り出すのではなく、むしろ当事者の回顧や記述からも切り離れた敗北と失敗から「現在」に続く累々たる闇の沈殿のうちに切迫した「抵抗」の断片を救出するほかないであろう<sup>17</sup>。

そうした意味で本文が対象とする「抵抗の学習」は、1920年代に「自由教育運動」から自由大学・労働者学校まで多様に展開した「自己教育運動」の源流が、単に圧迫され途絶したのではなく自ら限界に直面し解体または変質した後に始まった試行である。その意味で「教化総動員運動」下での社会教育局の設置・制度化と修養団をはじめとする「自発的」組織化を両翼として成立したファシズム期の「社会教育」が決して逸脱ではなく、「戦後」に再編する自己教育の公的システムへの糾合の原基をなすことを看過できない。この時期に自己教育を根底から変形させた要因は、端的に言って「個人」の自発性や欲求を禁止・検閲するよりはむしろ、積極的に「学習」へと組織化し意味付与し包囲する多方向的な「合意」形成への指向である点で、

「現在」に課題を引き継いでいる。ここで検討する中井正一（また三木や戸坂）の試みはこの学習する「大衆」の編成過程で、（田沢や小尾のような）ファシズム教化体制内での意味付与や1920年代的知識人による啓蒙の延長線上での文化運動とは異なる、抵抗する批判的学習主体の可能性を模索するものだったと考えられる<sup>18</sup>。

この背景となる複合的状況の分析は超然たる「学習主体」と歴史の客観情勢を画然と裁断するのでなしに、政治・社会・文化の領域を横断して「国民」主体と「危機」の喚声が軋みをたて連結する一連の有機的過程と、そこへの批判的介入としてのみ理解しうる。政治過程ではすでに31年9・18「満州事変」から「上海事変」、翌年「5・15」に到るなかで軍部と民間右翼は軍事行動の突出だけでなく、いち早く「国民的」危機を梃子に疲弊する農村に加え都市労働者・小市民層へも侵略の「生命線」と「国家改造」を両輪として提示しながら教化・修養団体を組織化していた。政府・文部省の1929年以降の社会教育局体制化での教化総動員運動はこれらと対抗しつつ利用・補強する形で1931年以降「思想問題講座」等を組織化し、「農山漁村経済（国民）自力更生運動」を国家―農本主義的な一大学習運動として収斂させようとしていた。この段階では国家官僚の構想に先行して（加藤完治や後藤静香のように）「協同・自律・友愛」等のそれ以前の「民衆運動」の価値を引き継ぎしばしば政府とは対立しながら、毛細管的に農民・労働者層に浸透したことに注意したい<sup>19</sup>。

だが同時にこの時期「社会」領域では小作争議・労働争議とも最大規模に達し、1920年代にくらべ小規模・未組織ながら切迫した闘いが（住居・公共料金のような）生活防衛と密接に結びついて展開された。日本共産党への大弾圧以後の中央崩壊と大衆運動方針の迷走や台頭した無産政党の分裂混乱にも関わらず「自然発生的に」澎湃したこれらの運動は、それ以前の組織だった啓蒙教育のように体系的ではないが、それまでになかった自己組織化への欲求を有して展開した。とりわけ都市部では失業者・小生産者など種々の層と要求を含む「社会」運動が、「政治」の後退局面を背景にしつつも一時的に参加可能な自律的空間として現出していた。この時期の社会教育政策と学の成立も「政治」が覆い尽くす国策・支配的側面に限定されない、（大内が指摘する）「科学的」指向を有した統合・システムの「社会政策的」側面での関心・欲求が多くの実践者と企画者を惹きつけたといえる<sup>20</sup>。

そして何より「文化」の領域で映画・ラジオ・雑誌などの大衆メディアが質量とも固有な領域を占め、娯楽・レジャー・スポーツの大衆的展開とあわせ個人が消費・享受する体験が拡大したことは、学校・組織外の「学習」経験を飛躍的に増大させた。むしろそれらが「享楽退廃的」「エログロナンセンス」の隆盛からファシズムの進展の中で国策翼賛に収斂していく道程や、逆に現代に続く斬新な「可能性」を指摘することは容易いが、当時最後の盛期を迎えた「プロレタリア文化運動」が旧来の「高級文化」の大衆化・普及化を政治闘争と直結した「知識人運動」に留まった理論的実践的貧困は根深い。文化を消費し享受する「大衆」の主体的個人化が同時に受動的集団化であるという矛盾した状況の中で、これを否定する「国民文化」への回帰が辿った本源性回復の陥穽とは異質な自己を異化する過程としての学習という問題自体が積み残される所以である。以下の章ではこうした角度から結論を急がず、1930年代初頭の京都におけるローカルな状況と空間で中井正一たちが関わった消費組合運動と雑誌『美・批評』

集団の試みを検討することで、この問題構成をさらに浮き彫りにしていきたい<sup>21</sup>。

### 3-2 京都における社会——運動状況の転換

まず『土曜日』などへ続く試みが「滝川事件以降」の知識人運動とは異なる背景と源流をもつことを強調するとともに、政治状況だけでなく顕著なミクロな社会的変動と緊密に関わるため、ここで舞台となる1931年前後京都の社会—運動状況の概略を俯瞰したい。京都でも共産党・全協は過酷な弾圧を受け学生を含む急進的な反戦・政治運動に影響を有しつつ孤立を強め、他方で（旧）労農党系の無産諸政党は山本宣治・水谷長三郎（初の普通選挙で唯二人当選）らを輩出し対立を含みつつ一大拠点を確認していた。特に1930年の鐘紡・市バス争議を経て労働運動・議会など合法領域でも急速に再建が進み、諸派混交で戦前最大規模の小規模争議が闘われ、家賃値下運動（借家人同盟等）などの都市・生活権運動も盛期を迎えた（年表参照）。これらは「中央」からの指導が弱まり相対的に自立した形態を取り、「満州事変」以降の政治情勢には（無産政党も）散発的抵抗しか見せなかったが、それ以前にない地域的職能的なヨコの連携やローカルな生活課題への関心が共有されつつあった<sup>22</sup>。

労働者層の自己教育活動もこれと関連して従来の総同盟労働学校や水平社夜学校など組織だった啓蒙活動は後退し、より争議現場や日常要求に切迫したパンフ・ニュースや講師派遣が要請されて、小規模の学習・研究会が各地で開かれた。一例をあげれば鐘紡争議を闘った総同盟では1930年初頭には京都労働学校を再興し、高橋貞三・土田杏村・西尾末広らを講師に週二回三時間の講座で社会思想史・労働組合論・無産政党論・時事問題などを教えていた。しかし同年末にはすでに総同盟では「争議激発方針」が未収集のまま行き詰まりが論じられ、連合会教育部から週一回数時間各支部に講師を派遣する「教育講座」と研究会・茶話会が計画され、労働組合運動・マルクス主義・無産政党などの安価な共通テキストの選定やニュースの発行が試みられている。恐慌後のこの高揚期を支えたのは小規模下層の労働者、とくに京都では友禅工（高野・西陣）はじめ繊維工業や印刷・金属・映画といった中小零細の町工場での争議であり、多くの職場で在日朝鮮人・被差別部落民・女性労働者が争議の前面に出た<sup>23</sup>。

高野に隣接する田中では旧水平社夜学校が朝田善之助らによって地域的闘争拠点となり、労働運動・水平社運動のほか消費組合運動・無産者医療・文化活動など多彩な活動を展開し、現場の多くを女性が運動を担った（長田・松岡らの回想）。さらにここでは人見亨らが極めてユニークな「養正ピオニール（少年団）」を組織し（1932年）、狭義の階級・政治教育ではなく文化・表現活動やスポーツ・生活課題から反天皇制まで含む自発的参加を重視する諸活動を生み出した。これは同年学校教師を追われた人見が無産者消費組合に従事しながら「新興教育」運動のピオニール運動の影響を受けつつ、他所のように学校内・教育内容に留まらず夜学校・路上などで親を含む地域的な活動に特色をもつ、水平社・消費組合・文化運動の広い支援のもと政治動員とは異なる、生徒の日常要求・反差別反天皇運動・自治的組織と「ヨウセイシンブン」や演劇発表会のような表現活動を展開した。また西陣では1931年以降ビロード工など、在日朝鮮人を中心とする地域的争議と独自のネットワークが長期に渡って組織され、相互支援・消費組合活動のほか反差別スト・朝鮮語ビラ発行（「京織工ニュース」）・レク活動などを展開していっ

た<sup>24</sup>。

他方文化の領域では1920年代のモダニズム文化・アヴァンギャルドや娯楽の模索が知識層・中間層に留まらず、大衆化・商業化したマスカルチャーとして大量に消費・流通する状況が、京都においても確実に進行していた。時代劇をはじめ映画・大衆小説・流行歌謡・写真が労働者層にも享受可能なものとして浸透し、大衆スポーツ・観光・ハイキングなども拡大し労働団体を含む小サークルへの参加も増大していた。こうした過程で雑誌・ラジオなどメディア媒体や喫茶店・カフェなど都市スペース、また広告・建築などのデザイン産業が新たな文化生産者・コミュニケーション形態を生みつつあった。特に京都は「明朗時代劇」のような映画産業の中心としてトーキー移行期のプロダクションから大規模資本集中の時期を迎え、衣笠貞之助・山中貞雄らの作家性の高い監督の登場の一方で「新興キネマ」をはじめ各撮影所ではこの再編期の争議も激しく展開された（のち『土曜日』発行を働きかける斎藤雷太郎も当時下加茂撮影所で全協活動に携わっていた）。他方でナップをはじめ「プロレタリア文化運動」の流れの文化運動が京都でも1931年前後をピークに展開されていたが、狭義の「政治主義への従属」や弾圧以上に文化運動としては労働文学（作家同盟）・演劇（青服劇場）・映画（プロキノ）の普及に限定され、大衆文化への関心は微弱で（娯楽要素を採用したりしながらも）広がりやを欠いた。これは共産党やナップ（後コップ）に限らず大半の政治運動・思想いずれもこの「大衆文化」領域での変化に対応せず（または拒絶し）、むしろファシズムの側が検閲や禁止から利用介入へと転換していくことになる<sup>25</sup>。

### 3-3 消費組合運動の多様な源流と学習活動

消費組合運動は（とりわけ京都では）こうした様々な社会運動・文化活動の間で、生活防衛や消費者運動ばかりでなく交流拠点と参加者の相互学習の機能をもち、また複数の異質な性格を持つグループの接点となった面を強調したい。それは労働組合運動・水平運動の付随的な「兵站」活動や後退期の消極的な「隠れ蓑」ではなくそれ自体自律的な意義を持ち、『土曜日』グループでも『世界文化』中心の「知識人の抵抗」とは別個のルーツをなす。この時期の状況をまず概括すれば、同志社大学の基督教労働者ミッションや賀川・ロッチデール派の流れを汲む中島重・石田秀一郎らの消費組合運動が能勢克男ら「同志社騒動」で大学を追われた人々を中心に再編された「京都家庭消費組合」が1929年に組織された（組合長能勢克男）。それ以前に京都購買組合や水平社消費組合なども存在したがこれは会員六百～九百名を数え本格的な経営体制を確立し、郊外住宅地のサラリーマンや知識層・芸術家を組織し精力的に活動を展開した（ここでの能勢・中井らの活動は後述）。1931年に入ると旧労農党・全協系活動家の新たな大衆運動の結集軸・合法基盤として壬生・西陣・田中などの染色工らを組織した「京都無産者消費組合」が結成され（組合長井上喜代松）諸争議とも連携し、また家庭消費組合と対抗して太秦・花園に「京都プロレタリア消費組合」も発足していた。他方同年、在日朝鮮人らが結成した「京都大衆消費組合」（七条）や「朝鮮人消費組合」（桂）では、日常生活の相互防衛的な組織から一つの運動拠点としての機能も果たし日消連傘下の朝鮮人消費組合とも繋がりを有した。また学生では家庭消費組合と関連した同志社学消のほか、活動家層を中心に京大学消が結

成され独自の購買活動以外にも、「学生自治権の確立」を掲げ幾度も弾圧を受けつつ最後の運動拠点となり、他の消費組合等の運動との接点ともなっていた<sup>26</sup>。

このように同時期に消費組合運動は複数の異質な要素を含みながら、逼迫する生活防衛に加えローカルな運動の（合法的）活動拠点として自然発生的に緩やかに形成され、独自の活動とネットワークを有していた。この過程で従来の本工組織労働者に代わり上記の中小零細の争議に参加した活動家・失業者層や、その担い手や家族だった女性たち、また労働者運動との接点を求めた知識層・学生や個人として参加する「市民」層に参加のスペースを開いた意味は大きいと思われる。また労働だけでなく生活・消費・日常課題を切り口として生産・社会・政治の問題に向かう志向性は、旧同志社等の強力なブレンを得たとはいえ他地域と同様、消費組合運動が積極的に地域・運動拠点となる必然性をもった。それは家庭消費組合で活躍した松岡道子・加納きくの回想からも「中間層が、頭の中だけでなく毎日の実践活動において、どうやって労働者の味方になりうるか」「自分も何か（組合に・注）役に立つことをしなければだめだ」という意識を生み、当初「マダムの模擬店」などと揶揄されつつ次第に信頼と共同性を培っていったことがわかる。たとえば加納は消費組合活動自体だけでなく班活動などを通じた「物だけじゃなしに、精神的な面での支え」や「人間と人間の結びつき、助け合い」が、当時の厳しい組合活動家の支えになっていたという<sup>27</sup>。

これら消費組合は非常に厳しい組合員の経済状態から常に財政難に瀕していたが、1932年には家庭消費組合・無産者消費組合を中心に「京都消費組合」（理事長能勢）が結成され、「実にユニークな、思想信条を超えた労働者農民、知識人、小市民、学生、朝鮮人の超党派の統一戦線組織」（井上）を形成した。特に同年の「政府払下米獲得運動」では組合員のデモ集会が敢行され、結成集会後無償の払下米の獲得と野菜等の直接共同購入・配布を実現し、工場などへの活発な班活動の拡大を計画した。この「第二の米騒動」とさえ言われた払下米獲得運動では労働運動活動家や松岡・新村・中井のような若い左派知識人も担い手として（運搬係から会計まで）「異常な情熱を傾けて」献身し、被弾圧者や過労で倒れるものを出す程運動を支えた。方針では争議やその地域への支援を打ちだして労働組合の物的精神的協力を行い、また当初から日本無産者消費連盟に加盟してニュースの発行のほか班活動で払下米をめぐる政府・流通の機構の暴露などを通じた教育宣伝にも力を入れた<sup>28</sup>。

こうした活動は労働者ミッション等のキリスト教人道主義的な協同組合論と、マルクス主義的な労働運動と連結した無産者（赤色）消費組合論の対立を孕みながらも、双方の特長を取り入れロジデールやオーエンの消費組合論を咀嚼した独自の路線に基づいていた。その中で教育活動については資料も希少で組織だったものは行なわれていなかったと考えられるが、能勢が当時参照した本位田やウェッブの消費組合論はいずれもその消費や協同組織の教育的意義を強く意識したものであった。たとえば本位田祥男の『消費組合運動』（1931）では消費組合が「何ら権力の援助なく、暴力によつて之を強制せず、全くその理想と目的に醒めた者のみの運動」である以上「現実の自覚と理想の把握とをもたらしものは、一に教育であり、民衆への宣伝」であるとされ、欧州の例をひき消費の仕組みだけでなく「協同社会」や利潤主義への批判を組合員・職員・民衆に広げることとする。さらに消費組合運動を消費者利益伸張・相互扶

助・産業民主主義とともに「社会教育運動」であるとし、「生活はもっともよき教育者」で「思想は生活によって啓蒙され」とし、特に労働者・女性が社会批判と新たな社会建設の力量を獲得する（政治運動を補う）意義を強調した。京都消費組合は地域的でありこうした体系的な学習活動を展開した訳ではないが、常務者一班活動では相談・「世話役活動」を重視し活動家層と組合員に変えがたい経験を残した（これが『土曜日』ばかりでなく戦後京都の生協・報道・市民運動にも多くの人材を残した所以である）<sup>29</sup>。この活動への能勢克男らの関わりとその意味については、次章で改めて考察したい。

### 3-4 初期『美・批評』グループと大衆文化批評

一方で後の『世界文化』・『土曜日』に繋がる今ひとつの流れとして1930年9月に創刊された初期『美・批評』の試み（～1932年7月）は、そのグループの「大衆文化」状況への評価一般ではなく批評ジャンルにおける独自の介入として理解したい。その核心は「滝川事件」以前の学術研究団体や1920年代モダニズム文化批評に留まらず、既述のナップ系文化運動とは異なる社会集団の批判的創造的可能性を探求したことにある。この側面は（中井正一論の他は）山田・平林等により断片的に紹介されたに過ぎず資料も少ないが、ここではその遭遇した課題領域についての特徴を述べる（その分析や組織的性格は次章以降）。これは人脈的にも近い戸坂らの「唯物論研究」や三木らの「プロレタリア科学」と同様、大衆文化と受け手の質的変容の岐路にあたって、「ファシズムの強制と民衆の自発性」の図式に二極化しえない「啓蒙」と自己教育の転換局面を意識した希少な試みだからである<sup>30</sup>。

その特徴は第一に映画・ラジオ・写真や演劇・音楽・文化の分野で、急速に単一の視覚・聴覚の同時伝達と経験共有しうるメディアが確立される事態を、その伝達手段としての利用・批判ではなくコミュニケーション形態自体の変化と可能性として分析したことにある。いずれも1920年代までに都市中間層／知識層を中心に文化消費・享受者が成立していたこの分野ではあるが、より不特定多数の（下層・労働者層を含む）多様で膨大な人々に一義的で匿名のメッセージを複製・配布し、同時にこの大衆生活そのものを対象とする文化領域が成立した。とりわけ1930年前後には映画における「トーキー革命」（と弁士の消失）と集中化をはじめ、ラジオの全国放送網の成立と流行歌謡の普及、写真における広告デザインとフォトジャーナリズムの一般化といった共通経験が現実化しつつあった。また1920年代後半以降選挙ポスターの一般化にともない、商業広告だけでなく社会運動・文化運動（また政府宣伝）でも図像と文字をデザイン化したポスターが一般化し、直接的なイメージの喚起と受容の素地が労働者農民層にも拡大していた。「映画の町」京都でも中小プロダクションの統合とトーキー化とともに、「見世物小屋」や芝居の中心であった新京極や千本が映画館を中心に都市空間が再編され、喫茶店や大衆的カフェがその交流の場となった<sup>31</sup>。

『美・批評』集団はこのように「大衆文化」領域を（慨嘆や「活用」ではなく）新たな社会的技術的関係の萌芽として積極的に分析したが、同時に第二にその「受け手」としての社会集団の性格に強い関心を保持していた。それは上記メディアを通じた情報の受動的な教化形成の対象でも逆に自律的に解釈判断する能動的な個人でもなく、「映画の眼」や「真空管の言葉」

を通して集団そのものの固有の性質を生じ動的に結節する過程を考察した。このメッセージの「受け手」としての大衆が量的拡大のみならず「国民教化」の宣伝とナップ等のアジプロ活動双方の拮抗する秩序編成の課題となる中で、1920年代的自発性とカオスの称揚では捉えきれない密度と機能を有した社会集団が浮上してきた。並行して前期のスポーツ・レジャー等の娯楽が労働者層に普及拡大しつつ（権田保之助の転換のように）強力に「国民娯楽」に向かって整除されながら、均質化しつつ差異化された「見る者・聴く者」としての身体を形成してきた。『美・批評』グループは知識人集団（ないし党）による「科学の大衆化」の単一経路とは異なる形であり、また集団の物理的性格が社会的性格に結晶化する局面を把握しようとしていた点で自由主義的個人主義の抵抗とも一線を画していた<sup>32</sup>。

さらに第三にこれは（大方の評価と異なり）1920年代的な「モダニズム」文化（批評）の延長線上で大衆文化消費の成立を賞賛するのではなく、むしろその限界点と崩壊局面にこそ立脚し僅かな可能性を探る試みでもあったことを強調したい。映画におけるキノキイ（映画の眼）やモンタージュ理論への評価やアヴァンギャルド芸術・「現代音楽」への関心が示すのは、個人の自発性・創造性や自由の無限の発展性や抑圧への抵抗ではなく孤独と不安に彩られた隘路に向かう危機への沈潜でもあった。と同時に「集団」への転回が「国民」や「階級」にアプリアリに収斂する道筋を約するものではなく、異質な諸要素が葛藤し「文化」の領有化をめぐる状況依存的（ないし「機能的」）に決定されることを意識していた。それゆえ大文字の「政治」を文化の領域で実現したり逆に防御したりするのではなしに、文化の領域そのもののなかでその社会的性格を批評し政治を抉り出すことが課題となる。『美・批評』集団それ自体による集団的作業や映画の自主制作などの創作活動はその意味でそれ以前の「前衛的」芸術批評から出発しながら、「受け手」としての大衆の文化—政治状況の中にみずからを位置づけ批判的に内側から介入する指向性を有していたといえる<sup>33</sup>。そしてその流れが後に能勢と中井の二人が編集・執筆の核となった『土曜日』およびそのユニークなスローガンの一つである〈生活への勇氣〉の思想に綿々と繋がる、「生きてここにあることを手離さない」批判的学習へのこだわりとなっていく。

#### 第四章 「抵抗の学習」への原基：二つの異質性の合流と協奏

##### 4-1 反ファシズム運動の困難な道のり：京都消費組合と初期『美・批評』

前章で述べた能勢らの京都消費組合の運動と中井らの『美・批評』の試みは、のちの『世界文化』（1935）・『土曜日』（1936）の発刊に到る集団のプロトタイプであるが、それは前史または参加者個々の「貴重な経験」ととどまるものではない。とはいえこれは1930年前後の「満州事変」から「5・15」へ到る政治過程のなかで侵略とファシズムへの直截な反撃を組織し得なかったのは明白であり、広範な大衆組織化や教育活動どころか非常にローカルなサークル的学習集団の一つに過ぎないとさえいえる。その意味で菅や宍戸のいう（評価においても）「情勢の全体への責任」が予め欠落しているというのは妥当な批評ではあるが、その「全体性」の可能性以前に実体的な「知識人」（集団）による「大衆」一般との関わりに常に回収されてきたことに注意したい。このグループの評価でさえ1933年「滝川事件」敗北以降の「知識人」グルー



プの参入と同質化が（その当事者の雄弁な証言にも支えられて）前提とされ、あくまで「知識人の自己変革」（馬場）という枠組みでの評価に向かったことは否定できない。

ここで初期の試みを情勢一般よりも局所的な抵抗の文脈と小規模な集団形成から辿りなおす意味はその社会運動・学習運動としての出発の中に、そこに参加した人々の「知識人」の位置の問い返しと再定位の原型を析出することにある。たとえばこの消費組合運動と『美・批評』双方に参加した中井正一にあっては決して神話化された「指導者」ではなく、米を運搬し班で語らう組合活動家の一人でありマイナーな同人批評グループの執筆者として状況と格闘したに過ぎない。そして京都消費組合も初期『美・批評』も（また「滝川事件」へのかかわりも）ファシズムの荒波ばかりでなく自らの組織的困難に突き当たる中で、多くの「失敗」を経ながら座礁し、「上から」の（党のテーゼのような）路線転換ではなく苦い教訓と突破口をかるうじてつかんだ。特にこの二つの試みと経験（および人脈）と深く関わる（『世界文化』よりは）『土曜日』にいたる道筋において、内部における「異質的要素」の肯定と「誤り」への率直さはその「作風」だけでなく組織論として異色である<sup>34</sup>。

とりわけその「集団」の位置づけは（中井について後にみるように）A. グラムシのように「階級」概念のアナロジーからその多元性・複合性に拡張するなかで、一義的に純化する統一性の全面肯定とも（1920年代的な）個人の集積とも異なる性格を持つ。それは消費組合運動（およびそれと結節した生活防衛運動・地域争議）のように、生産現場に限らない新たな異質な人々が切迫した生活・消費・日常の側面で結びつく側面を有した。これと同時に京都消費組合の成立過程と同じく（従来のセツルメント運動のような）先進的「知識人」の啓蒙的組織化が自然発生的要求に押されて転換を迫られ、限定的であれ自律的ネットワークの萌芽を見出した。このことは『美・批評』同人において「文化運動」を知識・芸術の普及・大衆化とは異なる意味で捉え、日常に接触する大衆文化表現・メディア（映画・ラジオ・大衆文学・演劇）の「批評」を通じた批判的介入に向けたこととも共通する。さらに後の「文化の消費組合」といった言葉が示すように他面で大衆文化がメディア自体として受け手・消費者・「見る者」として〈大衆〉を形成し、一枚岩ではない多層的な参加と「集団」化を（国家・商業・社会運動の多面から）促す面への関心が共有されてきた。

このような問題意識と客観状況の変化はこの小論で課題とする「抵抗の学習」の位置取りについても、中央集権的な学校（大学）拡大型・講師（知識人）主導型の主体形成とは別の、集団そのものを学習過程に転化する試みと解釈できる。同時期に当事者と隣接する試みでは、月島・大阪等の労働学校や日消連・関消連など消費組合組織ではより組織だった教育組織が指向され、大学講師や無産政党政治家の講義などを実施していた。また前述の（中井の最も親しい先輩であった）三木らの「プロ科」や戸坂らの「唯研」のグループのように研究所・雑誌のもと知識人を組織して大衆の「科学的」啓蒙に取り組む動きも活発化していた。こうした取り組みと比べるならば京都消費組合・『美・批評』の学習の位置はいかにも微弱で地域的・不定形な手工業的・「サークル的」性質は否めず、またその後の展開でもそれほど「学習」が主題化されない。だが1945年「終戦」直後のメンバーの様々な民衆教育活動への集中を考えれば、むしろ消極的・無関心ではなく当時から運動参加者が直面し接触する課題からの議論・討議の過

程を重んじ、そこに共に思考し提起する協働集団の組織化をイメージしていたと読むこともできる。以下ではそうした仮説的立場からこれに参加した諸個人に焦点を当てて考察を進めたい<sup>35</sup>。

#### 4-2 消費組合運動と「市民」の交錯：能勢克男を中心に

能勢克男らが1929年の同志社大学の理事会との対立（学園争議）の渦中で失職し、敗北感とともに「仲間といっしょの『我等』の意識…として行動した記憶」（能勢）を英国のロッジデール組合と重ね合わせ、同年「京都家庭消費組合」を結成した経緯にまず触れたい。この発足に関わった同志社「追放組」のうち中島重（新人会系のキリスト者でSCM・消費組合運動の育成・組織者）を中心に石田秀一郎・高橋貞三らは賀川豊彦の流れをくむ同志社労働者ミッションのセツルメント活動に1927年ごろから関わり、特に石田は「職員購買組合」の理事長を務めつつ労働者階級の消費組合運動の意義を広めていた（争議中急逝）。他方同じ法学部で東大「新人会」から海老名総長に誘われた住谷悦治・林要・波多野鼎・河野密（能勢・辻部も同世代）ら『社会思想』同人の教員は、大阪・京都等の労働学校の講師陣として活動し、広く交友・影響関係をもっていた。下鴨を中心とした京都北郊住宅地の市民層を基盤に発足した家庭消費組合はそこから、サラリーマン家庭・知識人などいわゆる中間層を組織し「プチブル的購買組合」と評されるが、能勢ら「ストライキ崩れの書生」（同）が財政的背景やノウハウ・社会的信用を得るばかりでなく、広範な「左派的」市民・知識人が労働者層と結びつく（啓蒙的・教育的）意図があった。

こうして「足をすりこ木にして」の戸別訪問で近郊市民層のほか大学人では河上肇・恒藤恭・末川博・西田幾多郎・田辺元や米田庄太郎・土田杏村の協力、芸術家では須田国太郎・伊谷賢蔵・柳宗悦・河井寛次郎等、また映画界では衣笠貞之助・伊丹万作等と広範な「リベラル派」の支持・賛同者を得ていった。能勢らはこうした「オルグ活動」や英国のウェッブ・オーエンや前述の本位田などの著作に学びつつ、「婦人部」の女性たちの労働者街での即売会・講習会や田村作太郎（教育）・森本陽明（繊維）らの労働運動家、さらに松岡義和・新村猛・中井正一・戸坂潤らの若い左派研究者の自発的な参加協力も得ていた。とりわけ松岡夫妻や新村らのこの運動への没入は消費組合の理念ばかりでなく、実際の労働者（特に下層）の生活とたたかいに接近し協働する自らの強い意欲に突き動かされ相互に刺激されたことが回想に記されている。例えば当時26歳の新村猛にとって「満州事変」や小林多喜二虐殺といった「日本の政治と社会無関心でいられなくする往時の歴史状況とわれわれ自身の内面的状況」による消費組合運動への参加のなかで、能勢らは理想に共感できた「大衆運動、むしろ社会運動に初めて参加した青年」の「信頼できる先達」として映っていた。この家庭消費組合時代の広いネットワークと経験が後の『土曜日』周辺の運動において引き継がれ、緩やかな「反ファシズム運動」形成の原型となる<sup>36</sup>。

しかしこの運動は初期からの財政的・組織的基盤の脆弱さの他にいくつもの困難と失敗に突き当たるが、特に組合理事内部での対立・分裂と、理事と従業員との対立は非常に厳しい経験となった。最初の理事長田原和郎の解任・分裂（洛友消費組合）はその「キリスト教主義」の

強要への批判が端緒だったが、能勢にとって組合運動の「党派主義」否定以上に運動内の意見（路線）対立に直面して分裂することの損害への痛苦的教訓を残した。さらに能勢が理事長に就任後直面した後の近藤一男ら従業員との対立もまた経営上・労働条件上の問題に終わらず、運動内の「支配・被支配の関係」に面したショックであり（当時ソ連での「粛清」の報と併せて）「団結」の意味と内実に深い反省を強いることになった。能勢自身はその教訓として何より「どんな主義主張の衝突にあっても組合を分裂にみちびくようなことは絶対に避けねばならない」ことをあげ、幹部や派閥の「主観的ひとりよがり」による損害と懊悩の重さを噛み締めている。その後の能勢（また新村・中井）らの軌跡を見るとこの消費組合運動の経験は肯定面だけでなく、「組織」・運動内部での意見対立や多元性の問題ないし組織内の意思決定の共同性や社会的政治的背景への尊重は、むしろこの「失敗」が原点とさえいえる。

こうした困難の中で既述のように1932年春に京都無産者消費組合等をはじめ旧水平社・朝鮮人・学生など諸層の消費組合を糾合して「京都消費組合」（京消）を結成し、実際に「無産階級」・大衆層に消費組合基盤を拡大していった。山本秋の回想に寄ればこの京消の結成は京都のみならず消費組合運動の全国的連携（日本消費組合協会）の大きな契機となり、またいわゆる「統一戦線」的な連合の希望と目されていた。特に京都無産者消費組合は旧労農党系の労働運動・水平社運動の活動家層の参加を得て「階級的消費組合」を掲げ、「京消」以降後も運動の中心の実体として西陣・壬生等で活動した。京都消費組合は結成後から日本無産者消費組合連盟（日消連）に加盟し、反戦デーに合わせ大衆集会・デモを敢行してのち配給をがちとった「払下げ米獲得闘争（昭和米よこせ運動）」のような華やかな成果の他にも地域での班活動・争議への継続的支援などに比重を置いていった。この中で女性活動家が家庭消費組合からの加納・松岡・能勢らのほか村田たき・川崎澄江・近藤糸子・井上礼子らが組合の組織化・常務活動・会計事務・販売にわたって実践活動の中心的な役割を担い、多くが家族生活を巻き込んで肉体的精神的限界まで献身したという。こうした活動では「常務者」と呼ばれる専従活動家（多くが左翼運動出身）が物品販売・配達・購入のほか班活動の相談世話役・ニュースの発行など組合員教育を献身的に担ったが、相次ぐ弾圧・逮捕に加え低報酬・過労によって病気などで倒れる者も続出したという。能勢ら理事は若い常務者たちと「経営主義と政治主義」の対立を経験しながら、無数の活動家・組合員たちとの交流・協働の中で「無産者」層の生活実態ばかりでなく運動の組織運営と多様な参加者層の共存を学ぶ、かえ難い経験を重ねてきたと言える<sup>37</sup>。

#### 4-3 初期『美・批評』集団の形成と性格

一方、雑誌『美・批評』は確かに美学の学術研究雑誌として出発したが、真下・久野・新村ら哲学科活動家が参入した後期（美批評研究会）から『世界文化』への移行の原型だけでなく、独自の「文化批評」の領域を目指したことは既に述べた。ここではそのユニークな組織活動と分析内容に触れながら、同時期の日本の「文化運動」には稀有な批評性ととともに一つの社会運動形態の模索とその思考のプロトタイプとして分析したい【資料3】。初期（1931・32年前後）の（のち「旧派」とされた）構成メンバーは、後期以降も『土曜日』に到るまで活動を担う中井・辻部・富岡益五郎・長広敏夫らと、この時期中心だった藤井源一・徳永郁介・藤田貞次ら

が、芸術領域で「新しい理論を自由に展開する『野の美学』（藤田）を指向して集まった。このうち後者（徳永・藤田ら）は中井と同じく深田康算門下の美学研究者として比較的オーソドックスな演劇論等を発表し「滝川事件」までの時期参加したが、前者のグループの所属関心は多様で後期以降も永く集団の核を占めることになる。

この初期『美・批評』集団（のち「美批評研究会」）は京大楽友会館での月一回程度の例会での徹底した相互批評・討論のほか、様々なテーマの研究会・討論会・読書会をメンバー以外にも広げ、哲学・文学・歴史や社会科学系の領域にも「批評」的関心を広げていった。同時期の三木・戸坂らの東京での左派「知識人」組織化と比較すれば小規模で若い（全員が30歳前後）同人とはいえ、新たな文化－社会状況への果敢な関心と何より相互討論・相互学習を重視する運営で、脱領域的な「批評」・討論に参加者を誘う魅力を持っていたといえる。特に中井正一はこの頃から参加者を「エネルギーで、無類のフレキシビリティと、プロダクティブな思索力」（辻部）をもつオルガナイザーとして登場しつつあったが、左派的ないしアカデミックな理論の指導者というより公私にわたる諸個人の議論・思索の媒介者・コーディネーターだった。また辻部は演劇論のほか中井らと共同での色彩映画『海の詩』『十分間の思索』の撮影制作、長広は専門の考古学のほか京大交響楽団での活動など表現活動への接点ももち、やや年長の富岡（哲学専攻）が編集・経営などまとめ役を引き受けていた。辻部によれば当時同人の関心は独仏英などのシュールレアリズム、シュプレマティズム、バウハウス、新心理主義文学、ノイエザッハリヒカイト（新即物主義）の諸理論やソ連のルポルタージュ文学・映画理論／実験・アヴァンギャルドを紹介・咀嚼しながら、「それらを一貫する新しき美の『集团的・社会的性格』の追及と、それを感覚的に基礎づける『物理的・コミュニケーション手段』の新たな出現の意義の解明」に集中した<sup>38</sup>。

こうした共同作業を背景に芸術史・演劇・文学のほか映画・写真・ラジオ・音楽などに広い理論的・批評的関心を共有したほか、1931年末以降の日本ナショナリズムが席卷する中で「日本文化」についての数次の特集も組んでいる。これらの論題では中井「機能概念の美学への寄与」「探偵小説の芸術性」「『春』のコンティニューイティ」「芸術的空間演劇の機構について」「物理的集团的性格」「日本的なるもの」「気質」、辻部「映画の道」「集团的性格の断片」「日本古代演劇の芸術社会学」「悲劇の発展性」「近松と西鶴－特に近松のイデオロギイ的理解」、富岡「笑と現代」「劇場の内と外」「真空管の芸術」「音形態の問題」「浮世絵断片」「録音芸術の問題」、徳永「芸術から技術へ」「不純粋芸術の純粋性」「国際広告写真展を観る」などが特徴的である。またディルタイの「近世美学史」（徳永訳）・ジームゼン「政策的芸術と芸術政策」（富岡訳）・グロス「独乙伝統に対する一言」等の翻訳紹介やノイエザッハリヒカイト（新即物主義）の特集（中井・富岡・辻部・徳永）といった理論の共有深化も試みられ、同人外の寄稿・参加も増加してきた。とりわけ中井の提起した社会集団（集团的社会的性格）についての運動／メディア論的考察は、感覚の「集团的組織の共感的熱情」や辻部の記録映画の「レンズ（映画）の眼」のように相互に刺激しあいながら、繰り返し各メンバーによって継続的関心を集めてきた。

この初期『美・批評』は「滝川事件」前後の流動で1933年5月中断され、約一年後真下・新

村・久野ら「新派」の参加を得て「反ファシズム文化運動」色を強調して再出発し旧メンバーの幾人かも去るが、この時期固有の「抵抗の学習」の萌芽があると考ええる。まず（三木らも自覚した）文化主義的知識人の啓発による諸個人の覚醒という図式が内包する限界を前提に、メディア・テクノロジーと社会的経験の均質化の中で生成される「集団」のインパクトを肯定的面も含めて理論的考察の対象にした。と同時にファシズムが〈危機〉を呼号して擬似「体制変革」運動として民族共同体への「自発的」参加に意味付与する趨勢に対し、文化における「大衆」的経験の内から批判的再考と創造的契機を探ろうとしていた。また「日本文化」を歴史化し脱本源化する作業や映画・写真などのメディア・大衆文化の社会的受容を考察するという関心の共有は、萌芽的にファシズムと抵抗する「集団」的主体を模索する路を付けた。これは同時期の共産党系マルクス主義者による政治重視の文化・啓蒙路線に比較すれば確かに消極的・内向的な「知識人」批評サークルではあるが、科学の「大衆化」とも異なる集団における「機能」・媒介としての（知識人の）理論／思考の共同作業という意味で他にはない実験をこの初期『美・批評』集団は形成しつつあった<sup>39</sup>。

#### 4-4 「反ファシズム」運動への緩やかな合流

この時期軍部ファシストがいくつものクーデタ計画と軍事行動をもって政治の表舞台に躍入する動きと並行して、農村・都市での社会教化・社会政策や報道・メディアを通じた世論工作・検閲体制を、国家・官僚と表裏で進行させていた。対して「非常時共産党」系の運動は相次ぐ弾圧で中央指導部を失いつつも労働運動（全協）や文化運動（ナップからコップ）に影響を保持したが、コミンテルン指導下の「大衆運動」方針は狭義の「政治」目標に社会・文化運動領域を従属させ他勢力を排撃する側面は継続した。そのため消費組合運動における日常・生活・地域レベルでの微細な諸闘争の連携や、大衆文化政治における批判的分析・批評の意味は、（個々の活動家は別として）中間市民層・プチブル層の諸運動として省みられにくかった。と同時に左派「知識人」の「大衆」の文化社会状況への位置取りもアカデミズムの方法・体系を社会分析に適用して普及する講座・講壇的スタイルが踏襲され、京都から東京へ移った三木・戸坂らの試みも党一科学を解釈伝達する機構に抵抗しつつ吸引された。対して京都における消費組合運動と左派知識人の「文化運動」の緩やかな連携は狭義の「政治」状況からはやや疎遠な立場でありつつも、実際の「大衆」（運動）の状況から出発することと異質な立場意見を包含する面では独自の形態を模索した。

長い間これらが「政治」を欠落させた「自由主義者」・モダニストの強いられた抵抗・文化運動と評価されてきたのは、大衆文化や日常生活面でのメディア・コミュニケーションを通じた「下からの」ファシズムとのたたかいが理解されにくかったことを意味する。加えて所謂「同伴知識人」とは異なり上部組織をもたず直接消費組合なり文化表現の当事者として自らを定位し、その中から発想する組織・実践の理論は（鶴見俊輔などを除き）戦後も必ずしもその文脈で読まれなかったからである。とはいえ京都消費組合は（「経営主義と政治主義」の対立が示したように）購買消費活動を主眼に生活を支える諸運動の連合体であり、他方で『美・批評』は純然たる批評運動であって、「反ファシズム」運動を担う意図は当事者にも強くなかつ

た。それが1933年以降休止していた『美・批評』再刊で中井を仲立ちにして真下ら京大唯研・同志社予科の左派グループと消費組合運動が旧『美・批評』メンバーの枠組みに入って、次第に前者は『世界文化』後者は『土曜日』に結実する様々な動きを、「美批評研究会」（この呼称は同誌廃刊後も1937年の弾圧まで継続する）を中心に形成するで次第に「反ファシズム」色を濃くしたのが事実であろう。ただ久野自らが『世界文化』への転換の過程を振り返り大衆文化批評や機械・映画論など『美・批評』のユニークさが引き継がれず、自分たち「政治的ラジカリスト」による文化の政治化・「ポリティージング」が「はなはだまずかった」というように、この時期特有の関心試行も多い<sup>4)</sup>。

何よりこの時期の消費組合と研究会を二つの軸として開始されたネットワークの最大の果実は、双方とも（能勢・中井らが）いくつもの失敗を経て相互批判・討議を重ねながら差異をはらんだ「集団」の意思決定の過程の対象化とさえいえる。久野や武谷三男・また能勢や新村が全く異なるジャンルと関心からこの研究会と繋がりをもち「反ファシズム」に投入したことを記しており、当時（特に1933年「集団転向」以降）抵抗の拠点と見なされた根拠があった。またこの時期の消費組合運動における様々な層の大衆運動・生活との共有とそこからの思考や、『美・批評』初期の大衆文化論を直接に理論的に考察する指向性は、かえって後期『美・批評』から『世界文化』の「知識人」路線にはない試行錯誤がみられる。むしろ後の『土曜日』発刊や文化サークルの運動に繋がる流れの原型は、この時期の消費組合と初期『美・批評』の人脈と発想が消化されて展開された面が強い。

そうした特徴は次章以降で検討するように単純に経験的・自然発生的に成立したものではなく、意識的に新たに登場しつつある大衆の「集団」の性格とそこでの理論・「知識人」の位置と機能を主題的に追及した思考に導かれた。これはこの人々と人脈的にも近しい実践に踏み出した社会主義系の理論家（能勢らと後期東大新人会、中井らと京大西田哲学左派）が、労働学校や研究機関を通して啓蒙活動に積極的だったのとは対照的である。戦後期の同人たちの「文化啓蒙運動」への参画を考慮すればそうした活動自体に否定的とはいき切れないが、この時点では教育の「大衆化」よりは小規模な学習－運動集団の祖形を模索していた。その立場はバラージュやルカーチ、またエイゼンシュタインなどに影響を受け、批判的マルクス主義内で文化領域－「上部構造」における闘争の自律的展開と階級形成における諸イデオロギーの拮抗、そこでの「知識人」の機能－関数的位置を強調するものだったといえる。それはまた国家主義とマルクス主義の従来型の啓蒙教化を超えた、相互討議と異質性を強調する集団的学習モデルを模索する試みとしても把握することができるという立場から、以下では中井正一の理論的考察を辿りながらこの面を浮き彫りにしたい<sup>4)</sup>。

1 『中井正一全集』③（1964）（初出『美・批評』1931年3月号）。

2 例えば初期では山代（1959）「ある農民運動の組織者」・羽仁（1954）「図書館人の使命」、和田（1958）「灰色のユーモア」・久野・本多他（1954）「戦争中の抵抗運動」、『思想の科学』関係では鶴見（1959）「思想の発酵母体」・鈴木（1960）「会議の論理の開拓者」・鶴見他座談会（1963）「中井正一と我々の時代」・多田他座談会（1963）「美と美学の将来について」・藤田（1966）『『生の』美学』等、また中井正

- 一全集発行(②(1965)・③(1964)巻・美術出版社)以降では(収録の解説の他)平林(1965-1968)「『美批評』『世界文化』『土曜日』」・郡「中井正一研究の視点」(1966)・松田(1965)『日本知識人の思想』(筑摩書房)所収「日本の知識人」・三浦「機能主義者の妄想」(1965)など、また思想の科学研究会編(1959)『転向：共同研究』(上)特に鶴見「転向の共同研究について」・藤田「昭和八年を中心とする転向の状況」参照。
- 3 この時期は例えばメディア・大衆社会論では稲葉(三)(1969)「中井正一の媒介論紹介」・久野・鶴見(1974)「コミュニケーションの原型を求めて」・杉山(1975)「中井正一試論」、また佐藤(毅)『現代コミュニケーション論』・高島(1976)『自由とポリティーク：社会科学の転回』(筑摩書房)・久野(1975)『30年代の思想家たち』(岩波書店)、復刻版『土曜日』(1974)・『世界文化』(1975)発刊以降では鶴見・山本編(1979)『抵抗と持続』(世界思想社)・馬場(1971)「1930年代と日本知識人」、菅孝行(1977)『反昭和思想論：十五年戦争期の思想潮流をめぐって』(れんが書房新社)所収「抵抗の思想的意義をめぐって」・伊藤(俊也)(1978)『幻の「スタジオ通信」へ』(れんが書房新社)、中井正一全集(①(1981)・④巻(1981)・美術出版社)前後では竹内(1980)『闊達な愚者——相互性のなかの主体性』(れんが書房新社)・稲葉(三)(1987)『マスコミの総合理論』(創風社)・池田(1988)「マス・メディア状況の言語表現」、図書館論からは加藤(1981)『記憶装置の解体——国立国会図書館の原点』(エスエル出版会)・岡村(1986)『表現としての図書館』(青弓社)など、また吉見編著(2002)『一九三〇年代のメディアと身体』(青弓社)吉見「1930年代論の系譜と地平」も参照。
- 4 この時期は中井正一研究では小畑(1994)『レトリックの相克——合意の形成から不合意の共生へ』(昭和堂)・木下(1995)『中井正一・新しい美学の試み』(リプロボート)・高島(2000)『中井正一とその時代』(青弓社)、また長妻(1990)「中井正一における抵抗の問題」・上野(1997)「翻訳者、脱党者、漂流者」・葛西(1998)「中井正一と『知』の民主主義」・刈部(1999)「モダニズムと秩序構想」、また鶴見他(2001)『「転向」再論』(平凡社)など、また山之内他編(1995)『総力戦と現代化』(柏書房)特に山之内「方法的序論」、小岸他編(1997)『ファシズムの想像力——歴史と記憶の比較文化論的研究』(人文書院)、山崎(2002)『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』(風間書房)第一章「戦時下における知識人の思想と行動」、天野(2000)「抵抗そして転向(翼賛)という歴史的事実」等参照。
- 5 佐藤(晋)(1996)『中井正一・「教育」の論理学』(近代文芸社)、藤田・大串編(1984)『日本社会教育史』(エイデル出版)第5章「天皇制ファシズム期の社会教育体制」、日本社会教育学会編(1988)『現代社会教育の創造』(東洋館出版社)所収・朝田「地域住民の芸術文化活動」・畑「芸術・文化活動と社会教育」、北田(1971)『日本国民の自己形成』(国土社)・碓井(1970)『社会教育(戦後日本の教育改革第10巻)』(東京大学出版会)等。
- 6 例えば小川編(1977)『現代社会教育の理論』(亜紀書房)小川「国民教化としての社会教育批判」、碓井編(1980)『日本社会教育発達史』(亜紀書房)松村「日本ファシズムと社会教育」・藤田・大串編前掲(1984)「社会教育の戦争責任」・早稲田大学社会科学研究所プレ・ファシズム研究部会編(1970)『形成期の研究』(早稲田大学出版部)松村「社会教育における国民教化の展開」、他方で例えば佐藤(広)(1997)『総力戦体制と教育科学——戦前教育科学研究会における「教育改革」論の研究』第5章「教育計画論と高度国防国家体制」、山之内前掲(1995)所収大内「教育における戦前・戦時・戦後」・佐藤(卓)「総力戦体制と思想戦の言説空間」等参照。
- 7 小川(1973)『社会教育と国民の学習権』(勁草書房)第二章「現代『社会教育』の教育的構造と機能」・同前掲(1977)、畑(1985)「教育思想研究方法の一試論」など参照。
- 8 このような論点の移行に関しては長浜(1984)『社会教育の思想と方法』(明石書店)所収「文化運動と社会教育」、また大串前掲(1981)「地域社会教育史研究の方法」参照。
- 9 たとえば藤岡(1977)『社会教育実践と民衆意識』(草土文化)・島田(1985)『地域を創る社会教育実践——生涯学習の時代をひらく』(エイデル出版)・社会教育基礎理論研究会編(1988)『社会教育実践の現在』(雄松堂出版)小林「住民運動の展開と社会教育」等参照。
- 10 トゥレーヌ／梶田訳(1983)『声とまなざし：社会運動の社会学』(新泉社)4「社会運動」、メルッチ(1997)『現代に生きる遊牧民(ノマド)』(岩波書店)社会運動研究会編(1999)『社会運動研究の新

- 動向』（成分堂）林容貫「新しい社会運動とネットワーク」等参照。
- 11 杉山（2000）『アラン・トゥレーヌ：現代社会の行方と新しい社会運動』（東信堂）所収「理論装置と社会運動論」、『システムと生活世界』（1993・岩波講座社会科学の方法第八巻）伊藤るり「〈新しい社会運動〉論の諸相と運動の現在」、梶田孝道（1988）『テクノクラシーと社会運動——対抗的相補性の社会学』（東京大学出版会）山之内靖他編（1993）『岩波講座社会科学の方法Ⅱ 20世紀社会科学のパラダイム』所収、A.メルッチ「民主主義再考」等参照。
  - 12 グラツィア／豊下他訳（1989）『柔かいファシズム——イタリア・ファシズムと余暇の組織化』（有斐閣）1章「同意の組織化」、塩原（1976）『組織と運動の理論——矛盾媒介過程の社会学』（新曜社）所収「運動論パラダイムの整理」等参照。
  - 13 ロー／山田・吉原訳（1989）『都市社会運動——カステル以後の都市』（恒星社厚生閣）第七章「都市社会運動の理論と実践」、吉原編（1993）『都市の思想——空間論の再構成にむけて』所収高橋「マニエール・カステルと『都市的なもの』」、トゥレーヌ前掲（1983）参照。
  - 14 「非常時」について「文学史を読みかえる研究会」編（1999）『「転向」の明暗——昭和十年前後の文学』（インパクト出版会）小沢他座談会「〈非常時〉の文学」参照。
  - 15 ベンヤミン（1995）「歴史の概念について」、メニングハウス（2000）『敷居学——ベンヤミンの神話のパサージュ』（現代思潮新社）所収「神話的なものの時間形式、永劫回帰」参照。
  - 16 『全集』④（1981）（初出『京都帝国大学新聞』1930年12月21日）。
  - 17 池田（1980）『闇の文化史——モンタージュ1920年代』（駸々堂出版）「あとがき」、市村（1987）『名づけの精神史』（みすず書房）所収『「失敗」の意味』、また菅前掲（1977）「抵抗（レジスタンス）の思想的意義をめぐる」など参照。
  - 18 祖父江（1990）『近代日本文学への探索——その方法と思想と』（未来社）所収「ファシズムと戦争下の思想・文化」、デ・グラツィア前掲（1989）「同意の組織化」、降旗編（1989）『戦時下の抵抗と自立』（社会評論社）同解説「戦時下の抵抗と自立」参照。
  - 19 早稲田大学社会科学研究所他編前掲（1970）松村「社会教育における国民教化の展開」、碓井前掲（1980）同「日本ファシズムと社会教育」、藤田・大串編前掲（1984）「天皇制ファシズム期の社会教育体制」参照。
  - 20 山之内編前掲（1995）大内「教育における戦前・戦時・戦後」、鹿野他編（1977）『近代日本の民衆運動と思想』（有斐閣）所収・金原「労働争議・小作争議と国民更正運動」、鹿野・由井編（1982）『近代日本の統合と抵抗4』（日本評論社）由井「総動員体制の確立と崩壊」、赤澤「教化動員政策の展開」参照。
  - 21 多数あるが赤澤・北河編（1993）『文化とファシズム——戦時期日本における文化の光芒』（日本経済評論社）所収・高岡「観光・厚生・旅行」、吉見前掲（2002）同「1930年代論の系譜と地平」など、また当事者として京都大学新聞社編（1985）『口笛と軍靴——天皇制ファシズムの相貌』・久野・池田（対談）「ファシズムと大衆文化」、鶴見（1971）『同時代：鶴見俊輔対話集』久野・鶴見（対談）「新しい人民戦線を求めて」参照。
  - 22 渡部編著（1959）『京都地方労働運動史』（三月書房）「第四編闘争の激化と戦線の錯綜（昭和三年～七年）特に「鐘紡争議と総同盟」・「家賃・電燈料値下運動」、また金原前掲（1978）特に「変革への構想と渦巻く争議」、犬丸（1978）『日本人民戦線運動史』（青木書店）「Ⅰ統一戦線運動の展開」参照。
  - 23 渡部前掲（1959）特に「総同盟と三谷伸銅・京都織物争議」、京都部落史研究所編（1987）『京都の部落史・史料近代3』（阿吡社）「水平社運動の成立と発展（社会運動との連帯）」京都市編・林屋辰三郎責任編集（1976）『京都の歴史9・世界の京都』（学芸書林）「Ⅱ-2 市民運動の展開」（渡部・秋定）参照。
  - 24 朴慶植（1990）『日本植民地下の在日朝鮮人の状況』（三一書房）『満州事変』勃発下の朝鮮人の動き」、同（1979）『在日朝鮮人運動史——8・15解放前』（三一書房）「侵略戦争に抗して——一九三〇年代」、部落問題研究所編（1973）『水平運動の無名戦士』長田「京都・田中の水平運動」、「養正ピオネール」については部落問題研究所（1986）『近代京都の部落』梅田（修）「人見亨の思想と実践——『養正少年



- 団』によせて」、柿沼（1981）『新興教育運動の研究』（ミネルヴァ書房）「新興教育運動における教育研究と教育実践」、土屋（1995）『近代日本教育労働運動史研究』（労働旬報社）「『新教』『教労』の教育認識」、中村（1973）『解放教育と子ども会運動』（明治図書出版）「『新教』『教労』とピオネール」など参照。
- 25 社会問題資料研究会編（1973）（下川巖著・復刻）『人民戦線と文化運動』所収「京都に於ける人民戦線の文化運動」、吉見（2002）前掲「一九三〇年代論の系譜と地平」、高島前掲（2000）「〈見ること〉の意味」京都市編前掲（1976）「Ⅲ－2 文化運動の混迷」（飛鳥井雅道他）。
- 26 京都生活協同組合編（1998）『デルタからの出発——生協運動の先覚者能勢克男』（かもがわ出版）能勢「戦前生協運動の思い出」、住谷他（1953）『京都地方学生社会運動史』（京都府労働経済研究所）「学生消費組合運動」、朴慶植前掲（1979）「赤色救援会、消費組合の活動」。
- 27 京都生活協同組合編前掲（1998）松岡・加納（対談）「京都消費組合運動の歩み」、渡部前掲（1959）「消費組合・水平社」、『全集』④付録松岡「中井正一君と消費組合運動」参照。
- 28 能勢克男先生追悼文集出版実行委員会（1981）『回想の能勢克男——追悼文集』（成文堂）井上「戦前の消費組合運動と能勢克男」、同新村「能勢克男さんの追憶」など参照。
- 29 本位田（1931）『消費組合運動』（日本評論社）「消費組合の事業」「消費組合運動の価値」（なお原文は旧字）、岡村前掲（1986）「京都家庭消費組合運動と中井正一」、また当時の資料として『大阪毎日新聞』の池松勝の連載「消費組合巡り」（1931年5～7月）がある。
- 30 山田（1963）「『美批評』、『世界文化』」（『思想』No. 470）、同志社大学人文科学研究所編（1968）『戦時下抵抗の研究Ⅰ』（みすず書房）平林「『美・批評』集団の成立」、辻部（1963）「『世界文化』と『土曜日』のころ」（『思想の科学』No. 17）、祖父江前掲（1990）特に「三〇年代前半におけるマルクス主義思想」参照。
- 31 伊藤（俊治）（1992）『20世紀写真史』（筑摩書房）「機械神の幻影」「デザインされるアイコン」、梅田（俊）（2001）『ポスターの社会史——大原社研コレクション』（ひつじ書房）、鴉明浩他編（1994）『京都映画図録』（フィルムアート社）「チャンバラ・スターの大全盛期」。
- 32 吉見（2002）『拡大するモダニティ』（岩波講座近代日本の文化史5）「大正文化研究とモダニティの文化政治」「世界的同時性と超克／衝突するモダニティ」、高島前掲（2000）「複製と〈集团的性格〉」参照。
- 33 ラン／兼松訳（1991）『モダニズム・瓦礫と星座——ルカーチ、ブレヒト、ベンヤミン、アドルノの史的研究』（勁草書房）、木下前掲（1995）「中井正一の生きかた」参照。
- 34 菅前掲（1977）「抵抗（レジスタンス）の思想的意義をめぐって」、馬場（1971）「1930年代と日本知識人——知識人運動における抵抗と自己変革の論理」（『社会思想』創刊号）のプロ科・唯研・『世界文化』評価、穴戸（1982）『現代史の視点——〈進歩的〉知識人論』（深夜叢書社）「思想の〈自立〉について」参照。
- 35 グラムシについて吉田拙論（2002）「ポジションとマヌーヴァ」（本誌1号）、また山崎前掲（2002）「『世界文化』『土曜日』の成立と運動の概要」参照。
- 36 京都生活協同組合編前掲（1998）能勢、能勢克男先生追悼文集出版実行委員会（1981）前掲井上、住谷らについては田中秀（2001）『沈黙と抵抗——ある知識人の生涯、評伝・住谷悦治』（藤原書店）「同志社時代と社会への眼」等参照。
- 37 山本（1982）『日本生活協同組合運動史』（日本評論社）特に「京都の消費組合運動」また、京都生活協同組合編前掲（1998）松岡・加納「京都消費組合運動の歴史」、岡村前掲（1986）「京都家庭消費組合と中井正一」等参照。
- 38 辻部（1965）『中井正一全集②』解説「『美・批評』創刊のころ」、また山田前掲（1963）、辻部前掲（1963）。
- 39 「『美・批評』創刊号（1930・9）～第27号（1933・5）」ほか、山田前掲（1963）および平林前掲（1968）参照。
- 40 京都大学新聞社編『口笛と軍靴』所収・久野池田（対談）「ファシズムと大衆文化」、犬丸（1978）、

絲屋（1979）『日本社会主義運動思想史 3』（法政大学出版局）、鶴見他（1963）座談会「中井正一と我々の時代」（『思想の科学』No. 14）、馬場前掲（1971）参照。

- 41 江口（1976）『都市小ブルジョア運動史の研究』（未来社）所収「日本における統一戦線」、富山他編（1988）『言語の冒険』（岩波講座20世紀の芸術 5）池田（1988）「マス・メディア状況の言語表現」等参照。

### 【資料 1】中井正一および『土曜日』グループ関係の主要研究論文の変遷

#### 〔第一期〕

（1950年代——当事者の回想と鈴木正らの発掘）

- 1952 中井正一没・羽仁五郎「図書館人の天職」他追悼文  
1953 住谷悦治他『日本学生社会運動史——京都を中心に』  
1954 久野収・本多秋五・平野謙他「戦争中の抵抗運動」（『討論・日本プロレタリア文学運動史』所収）  
1955 鈴木正「集团的主体の論理」  
1958 和田洋一『灰色のユーモア』、山代巴『民話を生む人々』  
1959 中井正一『美学的空間』（解説鈴木正）、山代巴「ある農民運動の組織者」、鶴見俊輔「思想の発酵母胎」

（1960年代——六十年安保後の『思想の科学』グループによる「中井思想」再評価）

- 1960 鈴木正「会議の論理の開拓者」、上山春平「中井正一の『委員会の論理』」  
1961 鈴木正『日本の合理論——狩野亨吉と中井正一』、平野謙「『世界文化』のこと」  
1962 中井正一『美と集団の論理』（解説武谷・富岡・鶴見・山代・羽仁ら）  
1963 鶴見他座談会「中井正一と我々の時代——民主主義の未来形」、多田道太郎他座談会「美と美学の将来について」、辻部「『世界文化』と『土曜日』のころ」、山田宗睦「『美・批評』と世界文化」・「委員会の論理」・「よみがえる中井正一」、物部晃二「中井正一 of 思想」  
1964 中井正一全集③『現代芸術の空間』（解説今村太平・多田道太郎・久野収）  
1965 中井正一全集②『転換期の美学的課題』（解説針生一郎・辻部政太郎・久野収）、平林一「『美・批評』『世界文化』『土曜日』（—1968）、真下信一・新村猛他「暗い時代と抵抗の歴史」、松田道雄「日本の知識人」（『日本知識人の思想』収録）、三浦つとむ「中井正一氏の美学の変革」「機能主義者の妄想」、後藤宏之「生産の論理と存在の論理」、羽仁五郎「国立国会図書館の設立」  
1966 尼ヶ崎彬「主体性の思索」、藤田竜生「『生』の美学——『中井美学』の示唆するもの」、郡定也「中井正一研究の視点——全集刊行に絡めて」、稲葉誠也「中井正一の図書館論」  
1967  
1968 武谷三男「1930年代と『世界文化』」（全集『弁証法の諸問題』解説）、同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究 I』（平林一『美・批評』『世界文化』と『土曜日』）

他)

- 1969 稲葉三千男「中井正一の媒介論紹介」、トマノ・ミミエ (所美都子)「予感される組織に寄せて」(66年執筆・『わが愛と叛逆』所収)

〔第二期〕

(1970年代——コミュニケーション研究から『世界文化』『土曜日』の再評価)

- 1970 三浦つとむ「中井美学の『独創』について」
- 1971 馬場修一「1930年代と日本知識人——知識人運動における抵抗と自己変革の論理」、多田道太郎「中井正一論」(『管理社会の影』所収)、真下信一「『世界文化』のころ」(『思想の現代的条件』所収)、久野・鶴見「新しい人民戦線を求めて」
- 1972 稲葉誠也「図書館を拠点にした運動」、後藤和彦「コミュニケーション史の研究史⑤中井正一『委員会の論理』」(『講座・コミュニケーション2』所収)
- 1973 しまねきよし「人民戦線——妹尾義郎と中井正一」、針生一郎「中井正一のコミュニケーション論」(『講座・コミュニケーション1』所収)
- 1974 復刻版『土曜日』(解説久野収・斎藤雷太郎)、久野・鶴見「コミュニケーションの原型を求めて」、新藤謙「美学論から組織論へ——中井正一の映画論」、稲葉誠也「中井正一の文化機構論——国立国会図書館」
- 1975 復刻版『世界文化』(解説平林一・対談新村・真下・和田・辻部・富岡)、杉山光信「中井正一試論——その言語・映画の論理と弁証法の問題について」、久野収『30年代の思想家たち』
- 1976 佐藤毅『現代コミュニケーション論』、高島通敏『自由とポリテイク』、渡辺一民『近代日本の知識人』、ねずまさし「プチブルの同人雑誌『世界文化』」、元浜涼一郎「知の取り扱いについて——中井正一覚書」、佐藤晋一「中井正一論——『委員会の論理』の原構造について」
- 1977 鈴木正『近代日本のパトス』、ねずまさし「『土曜日』・戦争前夜の娯楽新聞」、新村(談)「国際反ファシズム運動の紹介者」(『科学者の歩んだ道』所収)、和田「『世界文化』同人の体験」、久野「神は細部に宿りたまう」、菅孝行「抵抗の思想的意味をめぐって」(『反昭和思想論』所収)、上野輝将「戦後京都における文化運動と知識人」
- 1978 伊藤俊也『幻の「スタジオ通信」へ——かつて無名俳優斎藤雷太郎は最良のジャーナリストであった』
- 1979 鶴見俊輔・山本明『抵抗と持続』(真下信一「運動のリズム——『世界文化』創刊の辞をめぐって」、荒瀬豊「読者の弁証法——『土曜日』における実験と実践」、竹内成明「ユーモアとイロニー」、和田洋一「スケッチ風の自叙伝」)
- (1980年代——メディア論への関心から)
- 1980 竹内成明『闊達な愚者——相互性のなかの主体』、碓井雅久『日本社会教育発達史』
- 1981 中井正一全集①『哲学と美学の接点』(解説辻部政太郎・久野収)、同④『文化と集団の論理』(解説鶴見俊輔・中井浩)、追悼文集『回想の能勢克男』

1982

- 1983 門奈直樹『民衆ジャーナリズムの歴史』、田島良一「現代美学の危機と中井正一の映像論」
- 1984 藤田秀雄・大串隆吉『日本社会教育史』（「天皇制ファシズム期の社会教育体制」・「自己教育運動の復興と展開」）
- 1985 豊沢肇「日本知識人の“戦中”と“戦後”——中井正一の場合」
- 1986 岡村敬二『表現としての図書館』
- 1987 稲葉三千男『マスコミの総合理論』、志田昇「中井正一のリアリズム論と映画論」（上村博規『美学理論の展望』所収）
- 1988 池田浩士「マス・メディア状況の言語表現」（富山太佳夫編『言語の冒険』所収）、京都生協『デルタからの出発——生協運動と先覚者能勢克男』
- 1989 加藤一夫『記憶装置の解体——国立国会図書館の原点』

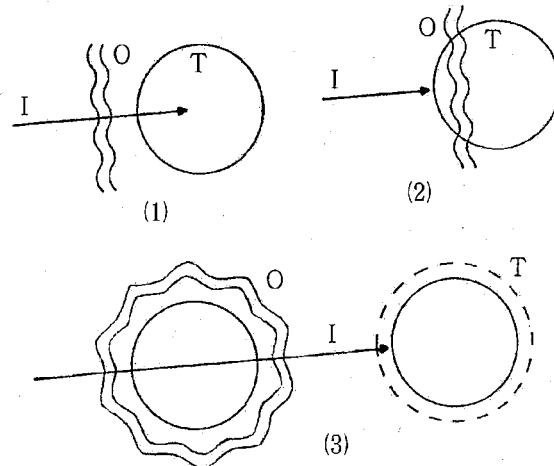
〔第三期〕

（1990年代——初期美学研究への関心と「冷戦」後の再審）

- 1990 長妻三佐雄「中井正一における抵抗の問題」、山代巴『私の学んだこと』
- 1991 鈴木正『思想者のシルエット』
- 1992 佐藤晋一『中井正一・図書館の論理学』
- 1993 大寺真輔「図式空間・切断空間——中井正一の映画理論について」
- 1994 小畑清剛『レトリックの相克——合意の強制から不同意の共生へ』、新村猛著作集第二卷『『世界文化』三十年代の政治思想的証言』
- 1995 木下長広『中井正一——新しい美学の試み』、佐藤晋一『中井正一・「教育」の論理学』、長田弘編・解説『中井正一評論集』、李今仙「中井正一——民衆文化の創出にかけた戦闘的生涯」（鈴木正・王守華『戦後日本の知識人』所収）、鯉坂他『京都・左京の十五年戦争』
- 1996 山代巴『千代の青春』
- 1997 上野俊哉「翻訳者、脱党者、漂流者——ディアスポラのなかの中井正一」、佐藤晋一「中井正一・「立法主体」の論理学」
- 1998 前川真行「美的空間と崇高」、葛西弘隆「中井正一と『知』の民主主義——『土曜日』の実践」、『久野収集Ⅴ』「市民として哲学者として」（高島通敏・聞き手）、門部昌志「中井正一の思想と映画——ポピュラー・カルチャーの社会学」
- 1999 荻部直「モダニズムと秩序構想——中井正一をめぐる小考」（『法の臨界Ⅱ』所収）、安部耕一朗「中井正一と図書館の近代化」
- 2000 高島直行『中井正一とその時代』、北田暁大「《意味》への抗い——中井正一の映画＝メディア論をめぐる」
- 2001 山寄雅子『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化活動』、鶴見俊輔・鈴木正・いだもも『転向再論』、田中秀臣『沈黙と抵抗——ある知識人の生涯・評伝住谷悦治』

【資料2】A. トゥレーヌ『声とまなざし』より

危機における「社会運動」のモデル（同書 p. 128、訳語は改変）



I : アイデンティティ Identite / O : 敵対性 Opposition / T : 全体性 Totalite

(1)–(3)「危機のなかの闘争」luttres critiques (⇔luttres affirmatives)

(1) 組織の水準：危機の行動 conduites de crises (例：解雇からの復帰)

I : 行為者 – O : 障害物 (I – Tを隔てる) – T : (社会) 組織

(2) 制度の水準：閉塞の行動 conduites de blocage (例：政治参加の閉塞)

I : 行為者 – O : 参加の障壁 (Tの門戸の守備) – T : 意思決定の場

(3) 歴史性の水準：革命的行為 action revolutionnaire

I : 行為者 – O : 支配的社会秩序 (Tとの断絶) – T : 新たな社会秩序

【資料3】初期『美・批評』執筆者・記事一覧

(山田宗睦『美・批評』『世界文化』(1963『思想』No. 470)より作成、創刊号～十八号)

- ・ **創刊号** (1930・9) : 中井正一「機能概念の美学への寄与」／徳永郁介「芸術から技術へ」／藤田貞次「いかにして趣味は変革されつつあるか」／ヘルマンマッケ (長広訳)「音楽経済学の理論的基礎」
- ・ **二号** (1930・10) : 園頼三「国文学美学の一課題」／長広敏雄「音楽における浪漫派」／富岡益五郎「笑と現代」／徳永郁介「不純粹芸術の純粹性」
- ・ **三号** (1930・11) : 須田国太郎「新たに見出された美の諸相」／中井正一「探偵小説の芸術性」／ドゥ・ファーリア (長広訳)「クロード・ドゥビッシイと西班牙」／キュンマーレン (藤田訳)「舞台空間の原理の美学について(1)」／ソボリエフ「ソヴキエツト劇場は何を演じつつあるか」
- ・ **四号** (1930・12) : 藤田貞次「短歌史上の基礎概念としての万葉集と古今的 (上)」／辻部政太郎「映画の道 (プロウキン的なものとヴェルトフ的なもの)」／山口隆一「デュアメル近業『未来生活の諸相』に就いて」
- ・ **五号** (1931・1) : 藤田貞次「短歌史上の基礎概念としての万葉集と古今的 (下)」／藤田

- 源一「ジョルジョ・ド・キリコ」／長広敏雄「ストラヴィンスキー展」
- ・ **六号** (1931・3)：中井正一「春のコンティニューイティ」／辻部政太郎「集团的性格の断片」／キューンマーレン（藤田訳）「舞台空間の原理の美学について(2)」
  - ・ **七号** (1931・4)：中井正一「芸術的空間演劇の機構について」／長広敏雄「明日の歌劇構成」／辻部政太郎「日本古代演劇の芸術社会学」／藤田貞次「俳優についての走り書」／富岡益太郎「劇場の内と外」／徳永郁介「国際広告写真展を観る」
  - ・ **八号** (1931・5)：伊東卓治「写真」／中井正一「物理的集团的性格」／徳永郁介「ヘルマン・コーヘンの沙翁論」／富岡益五郎「真空管の芸術」／ロー「学術的写真論争」
  - ・ **九号** (1931・6)：富岡益五郎「音形態の問題」／伊東卓治「筋」／長広敏雄「ラジオ（コンサート）の社会性」／I・T生「言語と時代意識」／キューンマーレン（藤田訳）「舞台空間の原理の美学について(3)」／グロス（T・I 訳）「独逸伝統に対する一言」
  - ・ **十号** (1931・7)：辻部政太郎「悲劇の発展性」／クーロア（長広訳）「近代音楽の純粋性」／I・T生「工芸品色々」／M・T「形而上的感觉」
  - ・ **十一号** (1931・9)：長広敏雄「ハンス・メルスマンの音楽美学」／藤井源一「演技的か非演技的か」／ディルタイ（徳永訳）「近世美学史(1)」
  - ・ **十二号** (1931・10)：中井正一「日本的なるもの（その一）」／徳永郁介「院展・二科展・構造社展」
  - ・ **十三号** (1931・11)：辻部政太郎「近松と西鶴——特に近松のイデオロギイ的理解」／藤田貞次「世阿弥の美意識形態について」
  - ・ **十四号** (1931・12)：伊東卓治「書」／ディルタイ「近世美学史(2)」／シュトリッヒ（藤井訳）「ルネッサンスとリフォーメーション（上）」
  - ・ **十五号** (1932・1)：中井正一「気質（かたぎ）」／藤井源一「AMENDO MODIGILIANI」／長広敏雄訳「日本の音楽——ジルマンシュックスの目に映じたる」／シュトリッヒ（藤井訳）「ルネッサンスとリフォーメーション（下）」
  - ・ **十六号** (1932・3)：長広敏雄「音楽美学の構成的要素について」／富岡益五郎「浮世絵断片」／ジームゼン「政策的芸術と芸術政策(2)」
  - ・ **十七号** (1932・4) 中井正一「ノイエ・ザッハリヒカイトの美学」／富岡益五郎「人間の実存性」／辻部政太郎「文学とノイエ・ザッハリヒカイト」／徳永郁介「新しい存在としてのノイエ・ザッハリヒカイト」／富岡益太郎「録音芸術の問題」／ジームゼン「政策的芸術と芸術政策(3)」
  - ・ **十八号** (1932・7) 蓮実重康「推古期彫刻の二三の問題」／藤田貞次「石庭」／伊東卓治「和様」／長広敏雄「パウル・ヒンデミットの近作『教本』」／T・N「国楽といふこと」／ジームゼン「政策的芸術と芸術政策(4)」

（一九～二十六号は欠本）

【関連年表】（渡部徹編『京都地方労働運動史（増補版）』（1968）、鯉坂真他編『京都・左京の十五年戦争』、などより作成）、太字は京都での動き

1929年

- 1月 京都借家人同盟成立
- 3月 山本宣治刺殺事件（5日）／京都青服劇場成立
- 4月 「4・16事件」（日本共産党弾圧）／「左京区」設置／「同志社大学騒動」起こる
- 7月 浜口雄幸内閣成立／社会教育局設置
- 8月 （この頃同志社事件辞職教官、家庭消費組合活動開始）
- 9月 「教化総動員運動」開始（中央教化団体連合会設置）
- 10月 世界恐慌開始／「プロレタリア科学研究所」設立
- 11月 京都家賃値下期成同盟結成

1930年

- 2月 総選挙（労農党河上肇ら落選）
- 4月 鐘紡（京都工場）争議（－7月）
- 5月 プロ科弾圧（三木清ら検挙）、京大学生消費組合結成
- 6月 京都市バス争議
- 7月 総同盟、京都労働学校再興
- 8月 総評結成（1日）／京都家庭消費組合正式結成（5日）／新興教育研究所設立
- 9月 『美・批評』（第一次）創刊（－33年5月）
- 10月 京都家庭消費組合活動開始／（霧社事件）
- 11月 文部省・青年教育振興の訓令

1931年

- 1月 総同盟・社民党、京都労働学校開講／京都プロレタリア消費組合結成
- 2月 京都無産者消費組合準備会結成
- 3月 3月事件（桜会クーデタ未遂）／京都ナップ演劇映画大会
- 4月 日本共産党再建（風間ら）／「洛北診療所」開設／浜口首相狙撃・若槻内閣成立
- 5月 （大阪毎日新聞で「京都消費組合巡り」連載－7月）
- 6月 新興教育研究所京都支部事件（18日）
- 7月 京都無産者消費組合結成（4日）／ドイツでナチス第一党に
- 9月 「満州事変」（18日）／京大学生消費組合弾圧事件（－10月）
- 10月 ナップ解体・コップ（日本プロレタリア文化連盟）結成（24日）
- 12月 内閣総辞職・犬養内閣成立／全国学消連盟結成

1932年

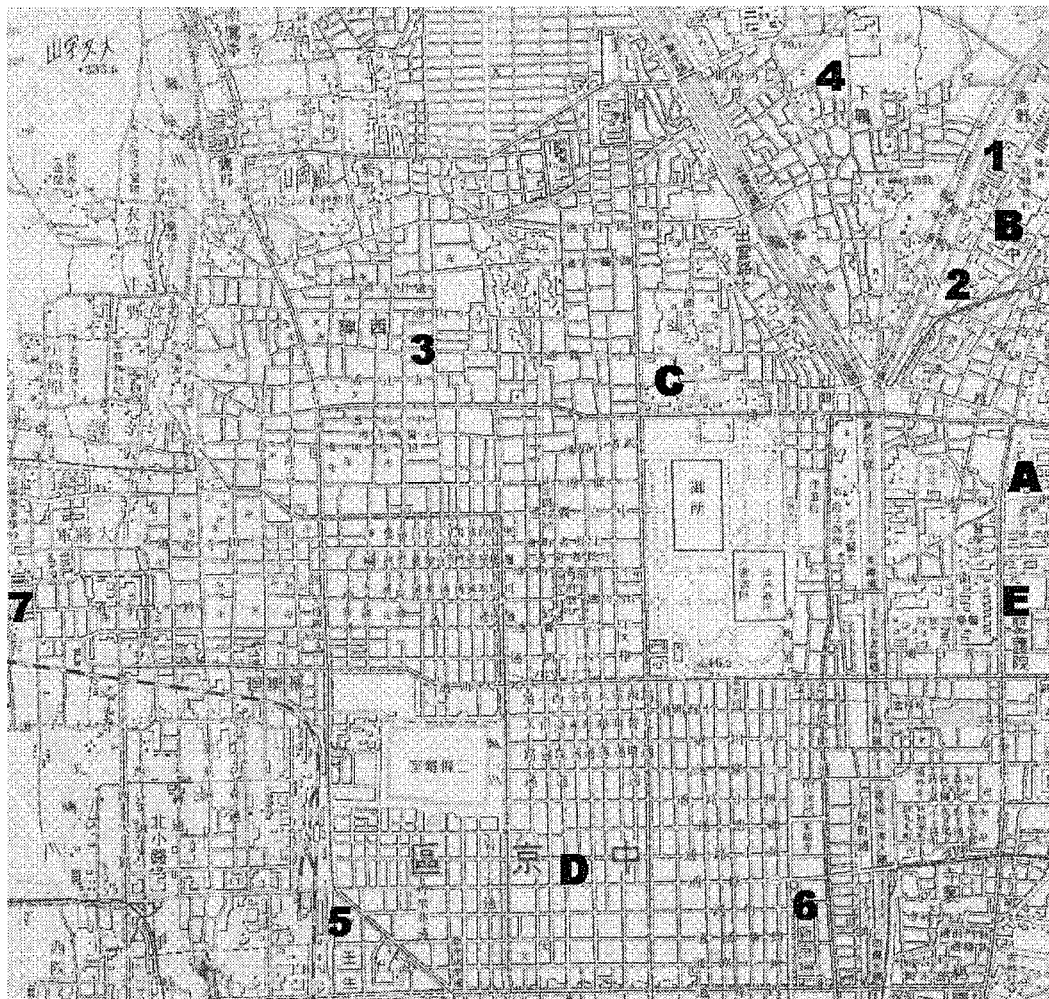
- 1月 「上海事変」（28日）
- 2月 日本無産者消費組合連盟結成
- 3月 「満州国」宣言
- 4月 京都消費組合結成／「養正少年団」結成

吉田：生活に対する勇氣（前編）

- 5月 「5・15事件」／「32年テーゼ」発表／斎藤内閣成立・「自力更生運動」  
6月 京都放送局開局  
8月 反戦デー・京消米よこせデモ（1日）／国民精神文化研究所設立  
10月 「唯物論研究会」結成／色彩映画『十分間の思索』（中井）『海の詩』（辻部）上映

【関連地図】

当時の京都市北部の地図（1931年作成『京都市全圖』（京都市土木局蔵版）より作成）



- 1 高野：紡績・友禅工場の集中地域（争議多発）、京都家庭消費組合・京都消費組合本部
- 2 田中：田中水平社（旧）夜学校・養正少年団・無産者消費組合支部・洛北診療所等
- 3 西陣：西陣ビロード工争議等繊維工場集中（争議多発）、新興教育研究所事件
- 4 下鴨：京都家庭消費組合の中心地、能勢克男・中井正一らの自宅、松竹下加茂撮影所
- 5 壬生：京都無産者消費組合本部、京都消費組合の中心地
- 6 新京極：映画館・芝居小屋などの集中地、喫茶店・カフェも多い
- 7 花園：京都プロレタリア消費組合の活動



- A 京都帝国大学：京大学生消費組合・弾圧事件、瀧川事件（1933）
- B 鐘紡京都工場：鐘紡争議（1930年）
- C 同志社大学：同大学生消費組合・購買組合、同志社事件（能勢・中島重らの免職）
- D 三条青年会館：「米よこせデモ」等消費組合・労働運動関係の集会（現京都 YMCA）
- E 京大楽友会館：『美・批評』研究会の例会